○夫慈以戰則勝、奕作「夫慈以陳則正」。

○第七十三章、天之道、不レ爭而善勝。

夫慈以戰則勝、以守則固。天將救之。以慈衛之。

【譯讀】夫れ慈は以て戰へば則ち勝ち、以て守れば則ち固し。天將に之を救はんとす。慈を以て之を衛れば なり。

【字義】○衛　其の身を護るを謂ふ。

【直解】第三節、特に三寶中の最も貴き慈の效驗を反復して說く。夫れ慈仁の德は特に平世に施して效驗の著しきのみにあらず、人人慈仁の心あれば、上の者は下の者をあはれみ、下の者は上の者を愛すること、子弟の父兄を捍護するが如く、互に相親み相庇ひて休戚を同うし、恩愛の至は、己が身命を拋ちても惜まざる程の勇氣を生じ、上下一和、孟子の所謂人和（公孫丑下）を得るが故に、是を以て戰に臨めば、如何なる强敵にも打ち勝つことを得べし、是を以て國を守れば、如何なる大軍にて押し寄せ來ると も、危き事なし、この以戰則勝、以守則固の二句は六韜にも屢〻見えて兵家の誇とする所なり、さて其の上に天は善人に與す者なれば、慈仁の德ある者は、天よりも之を救ひ援けて福利を與ふるやうになるは、もと慈仁

の德を以て自ら其の身を護るが故なり、これ慈仁の無價寶たる所以にあらずや。廣瀨建曰く「或人問ヒテ曰ク、老子ハ道可レ道非常道ト云フテ、仁義孝悌等ノ名目ヲ捨テ、專ラ無名ヲ貴ブ、然ルニ今三寶ノ名ヲ立テ人ヲ敎フル者ハ、何ゾヤ、答ヘテ曰ク、三寶ト云フ事、實ニ其ノ名目アルニ非ズ、只一箇ノ無ノ字ヲ形容シタル言ト知ルベシ、只無ヲ守リテサヘ居レバ、自然ト物ヲ害ヒ傷クルコトナシ、其處ヲ慈ト云ヒタル也、無ヲ守レバ、多事ナラズ、多慾ナラズ、故ニ自然ト儉ニナリ、無ヲ守レバ、事ヲ思ヒ立ツコトナク、自然ト人ノ後ニナル、始ヨリ三ケ條ト立テ、之ヲ守ルニハアラズ、然ルヲ寶トシテ之ヲ持スルト云ヒシハ、人不肖ニ似タリト云ヒシ故ニ、已ムコトヲ得ズシテ其ノ方角ヲ知ラセタル者ナリ、讀者辭ニ泥ムベカラズ」と、善く老子を讀む者といふべき也。

○河上公、以此爲配天章。

○奕本、善爲士上、有古之二字。武下、有也字。不與、作不爭、河上作不與爭。極下、奕有也字。

善爲士者章第六十八　四十三言

【章旨】此章、聖人善く人に下ることを言ひて、以て爭はざるの德を明かにし、前章の意を釋く。

善爲士者不武。善戰者不怒。善勝敵者不與。善用人者爲之下。是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天。古之極。

【譯讀】善く士たる者は武からず。善く戰ふ者は怒らず。善く敵に勝つ者は與にせず。善く人を用ふる者は之が下と爲る。是を爭はざるの德と謂ふ。是を人の力を用ふと謂ふ。是を天に配すと謂ふ。古の極なり。

【字義】○士　卒の帥なり、古は車戰を用ふ、甲士三人車上に在り、左なるは弓を執り、右は矛を執り、中は車を御す、戰卒七十二人、車下に在り、蓋し至りて爭ふ者は唯兵のみ、故に之を借りて以て爭はざるの德を明かにす。

○第七十三章、勇於敢則殺、勇於不敢則活。

○次章、抗兵相加、哀者勝矣。

○第六十六章、江海之所以能爲百谷王者、以其善下之也(中

○武　先だつことを尙びて人を陵ぐをいふ。○不與　與に爭はざるなり、與一本に爭に作る。○古之極　古の道の極致なり。

【直解】戰士たる者が、强武を貴ぶは當然の事の如くなれども、善き戰士に至りては、武ばりて人に先だつことを尙ばず、强くして人を陵ぐといふことなく、却つて臆病者の如くに見ゆる者なり。聖人は已むことを得ずして後に戰ふ、故に善く戰ふ者卽ち戰の上手なる大將は、怒に乘じて兵を動かし、濫りに人を殺すといふこと無き也。怒に乘じて人を殺す者は、天必ず之に殃する也。又敵に勝つことの上手なる者は、敵を相手にして勝負を爭ふことを爲さず、卽ち吾の爭はざるを以て、彼の爭ふに勝つやうにする也、司馬仲達が諸葛孔明より巾幗を贈り辱められたれども、終に怒りて之と爭ふことなかりしが如し。第七十三章に天之道、不爭而善勝といひ、孫子謀攻に百戰百勝、非善之善者也、不戰而屈人之兵、善之善者也とあるは是れ也。凡そ人を用ふる者は、己の地位を恃みて動もすれば人に高ぶる習あるを、上手に人を用ふる者は、却つて謙虛にして人の下となるが故に、人人悅服して死力を出だし、戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず

略)欲レ先レ民、必以レ身後レ之。
○第七十二章、天之道、不レ爭而善勝。

取る史記高祖紀ことを得る也、前節にて述べたる漢の高祖が三傑を用ひたるが如し。それ是れを謙虛にして爭はざるの德といふ也。これを人の力を用ふることを得るといふ也。聖人は爭はざる德ありて此四善を全うし、己の智能を恃まずして、衆人の力を用ひ、以て事を成すこと、猶ほ天の無爲にして自然に成るが如し。故にこれを廣大なる天の道に合すといふ、是れ實に古の道の極致といふべき也。

【辨正】兪樾曰く「此文王弼注ナシ、河上公、是謂レ配レ天ノ四字ヲ以テ句ト爲シ、注シテ云フ、能ク此ヲ行フ者ハ、德天ニ配スル也ト、古之極ノ三字句ト爲シ、注シテ云フ、是レ則チ古ノ極要ノ道ナリト、然レドモ、此章毎句韵アリ、後ノ三句德・力・極ヲ以テ韵ト爲ス、若シ是謂レ配レ天ヲ以テ句ト爲サバ、則チ韵ナラズ、疑フラクハ古ノ字ハ衍文ナラン」と。此說從ふべきに似たれども、今姑く舊貫に仍りて解せり。

○河上公、以レ此爲レ支用章。
○用レ兵有レ言、奕作レ用レ兵者有レ言曰。
○奕本、執無レ兵句、在レ仍無レ敵句上。

用兵有言章第六十九　五十四言

【章旨】此章、重ねて戰を借りて前章の爭はざるの德を明かにし、以て第六十七章の三寶慈を以て本と爲すの意を釋く。

用レ兵有レ言。吾不レ敢爲レ主而爲レ客、不レ敢進レ寸而退レ尺。是謂レ行無レ行、攘無レ臂、仍無レ敵、執無レ兵。

【譯讀】兵を用ふるに言へることあり。吾敢て主と爲らずして而して客となり、敢て寸を進めずして而して尺を退くと。是を行くに行なく、攘ぐるに臂なく、仍くに敵なく、執るに兵なしと謂ふ。

【字義】○用レ兵有レ言　古の兵家に此言あるをいふ。○主・客　主とは先きに兵を擧ぐるをいふ、軍の發頭人となる也。客はそれに應じて相手方となるをいふ。蘇註に「主ハ事ヲ造ムル者ナリ、客ハ敵ニ應ズルモノ也」とあり。○行無レ行　上の行は往く也、下の行は行列なり。○攘　袂を上にかかげて腕まくりする也。○仍　就なり。○兵　五兵卽ち戈・矛・殳・戟・

干なり。

【直解】第一節、已むことを得ずして兵を用ふるを言ふ。夫れ兵は凶器にして戰は危事なり。戰爭の爲めには空しく無數の生靈を亡失するに至ること、古今其の例甚だ多し。慈心ある者の好むべき事にあらず。夫れ道の尙ぶ所は慈仁にして、天の惡む所は殺伐なり。されば先方より無法なる事を仕向け、兵力を以て我に加へ、國家の主權を侵害せんとするに及び、萬萬已むことを得ずして之に應戰するあるのみ。固より吾は慈心ありて戰爭を好まざれば、縱令已むことを得ずして應戰するやうになりても、吾は敢て一寸にても進みて敵と爭ふことを爲さず、退くことは一尺も退きて、成るべく爭を避くるやうにするなり。これ皆始より戰爭する意なきに由る也。すでに戰爭に意なきが故に、これを行列の備はあれども、それを賴みにして進みて敵を伐つことをせざれば、行列の備なきも同じ事なり、折角臂はあれども、それを賴みにして腕卷くりして擊つてかかる事なければ、攘げ上ぐるに臂なきも同じ事なり。敵は眼前にひかへ居れども、此方には戰意なく、それに就きて爭ふことをせざれば、就く

○奕本、兩輕、竝作レ無、幾上、有二則字一。喪作レ亡。加作レ者。哀上、有二則字一。

○第七十三章、勇二於敢一則殺。

に敵なきも同じ事なり。干や戈などの兵器はあれども、それを執り持ちて此方より進みて戰はんとするの意なければ、執るに兵器なきも同じ事なり。以上の數句は皆此方より主となりて兵を動かすことを爲さず、萬萬已むことを得ずして、然る後に兵を動かすことの形容なり。

禍莫大於輕敵。輕敵幾喪吾寶。故抗兵相加、哀者勝矣。

【譯讀】禍は敵を輕んずるより大なるは莫し。敵を輕んずれば幾んど吾が寶を喪ふ。故に兵を抗げて相加ふるに、哀む者は勝つ。

【字義】○喪　失なり。○寶　第六十七章の慈・儉・謙の三寶をいふ。○抗　擧なり、手を以て物を擧ぐる也。○哀　あはれむ、卽ち慈愛なり。

【直解】第二節、兵を出だして戰ふに、慈仁の心ある者、最後の勝利を得ることを言ふ。前述の如くなるが故に、すべて禍は敵を侮り輕んずるより大いなるはなし。敵を侮り輕んじて此方より進み攻むれば、殆ど吾が慈悲・儉約・謙遜の三つの寶を亡失するに近しといふべし。故に必ず敗亡するに至る。魏の曹操の赤壁に敗れ、晉の苻堅が八公山に敗れしは、皆敵を侮

○第三十一章、樂殺人者、則不可以得志於天下矣。

り輕んじたるに因る也。故に互に兵を擧げて相戰ふに當りては、哀む心ある者卽ち慈悲の心深き者が勝を得る也。何となれば前にも慈なるが故に能く勇といへるが如く、慈悲の心深き者は、部下の兵士の死傷することを氣の毒に思ひ、勞りて大切にするが故に、兵士も其の慈仁の深きに感激し、上下一和、全軍の士氣大いに振ふが故に能く敵に勝つことを得るのみならず、第六十七章に慈仁の心ある者は、天も將に之を救はんとすとあるが如く、天地神明の加護さへありて、必勝を得ること決して疑なき也。孟子（梁惠王上）に梁の襄王が天下惡くにか定まらんと問ひたるに、孟子對へて一に定まらんと曰ふ、襄王又問ふ、孰れか之を一にせんと、孟子對へて人を殺すことを嗜まざる者、能く之を一にせんとあるは、當時列國の諸侯互に雄長を爭ひ、攻伐相尋ぎ、皆人を殺すことを嗜まざる者なし、是を以て天下を統一すること能はず、若し人君仁慈を以て心と爲し、天地の萬物を生育する心に法り、好生を以て德と爲して、人を殺害することを嗜まざる者あらば、則ち天下の民、皆其の心を歸して能く天下を統一することを得んとの意にて亦此意に外ならず。第三十一章に樂殺人者、不可得志於天下矣とあるは、蓋し此意を反說せし也。蘇轍曰ふ「聖人ハ慈ヲ以テ寶ト爲ス、敵ヲ輕ンズレバ則チ戰フコトヲ輕ンズ、戰フコトヲ輕ンズレバ、則チ人ヲ殺スコトヲ輕ンジ、其ノ慈タル所以ヲ喪フ、兩敵相加フルニ、而カモ吾ハ已ムコトヲ得ザルニ出ヅレバ、則チ哀心アリ、哀心見ハレテ而シテ天モ人モ之ヲ助ク、勝タザルヲ欲スト雖モ得ベカラザル也」と、此解之を得たりといふべし。

○河上公、以此爲知難章。
○沈曰、此章貴宗。

○天下莫能知、莫能行、奕作而人莫之能知、莫之能行。君、奕作主。
○不我知下、奕有也字。淮南同奕。我貴奕、作我者貴。褐下、奕有而字。

吾言甚易知章第七十　四十七言

【章旨】此章、聖人和光同塵の德あり、人の知ることを貴ばざるを言ふ。

吾言甚易知、甚易行。天下莫能知、莫能行。言有宗。事有君。夫惟無知、是以不我知。知我者希、則我貴矣。是以聖人被褐懷玉。

【譯讀】吾が言は甚だ知り易く、甚だ行ひ易し。天下能く知ることなく、能く行ふことなし。言に宗あり。事に君あり。夫れ惟知ることなし。是を以て我を知らず。我を知る者希なれば、則ち我貴し。是を以て聖人は褐を被て玉を懷く。

【字義】○宗　大宗にして族を總ぶるもの、總本家といふが如し、ここは主意の義に用ふ。○君　民を總ぶる者にして民の主とする所なり、ここは宗と同じく主意の義とす。○被褐　褐は粗き毛布、賤人の服する所

○第五十三章、大道甚夷。

○第十五章、微妙玄通、深不可識。第六十七章、天下皆謂我大似不肖、夫惟大、故似不肖、若肖久矣其細也夫。

なり、被褐とは其の德を韜晦するに喩ふ、和光同塵に同じ。○懷玉　內にすぐれたる德あるに譬ふ、論語陽貨に懷其寶とあるに同じ。

【直解】吾が說く所の言は、虛無自然の道に因りて言ふが故に、最も易簡にして甚だ知り易く、甚だ行ひ易き也。然るに天下の廣き能く之を知る者なく、能く之を行ふ者なきは、歎ずべきの至なり、抑も吾が言には宗卽ち主意とする所あり、無爲にして自然の道に從ふべしといふが吾が言の主意なり。吾が行ふ事には君卽ち主意とする所あり、無爲自然の道に因りて行ふべしといふが吾が行ふ事の主意なり。此主意だに悟り得たらんには、吾が言を知りて之を實地に行ふことを得べきも、夫れ唯此主意を悟り知る者なし、故に泛泛乎として風を係ぎ影を捕ふるが如く、何人も我が道德のすぐれて尊き所以を知らざる也。假令天下に一人や二人は我を知りて吳れる者ありとも、其の我を知る者の極めて稀なれば、稀なる程、反つて我が道の大いに貴き所以の證とすべき也。何となれば第四十一章にも不笑不足以爲道とあるが如く、凡夫は虛無自然の道の廣大なることを悟り知ること能はざれば也。是を以て聖人は道德が身に

備はりあれども、光を和げ塵に同うして深く其の賢を韜み藏して外に顯はすことを欲せず。之を譬へば外には賤人の服する粗惡なる毛布の衣を被て、內には美くしき寶玉を懷くが如き也。玉は以て虛無自然の德に比す。此の如く聖人君子は盛德あれども、容貌は愚なるが如くに見ゆるが常なり。これ其の人物の最も尊ぶべき所以にして、素人眼にては知り分くることの難き所以なり。被褐懷玉は中庸の衣錦尙絅とあると同じ意なり。

○河上公、以此爲知病章。
○沈曰、此章貴不知。
○奕本、上、作尙矣。病下有矣字。聖人下、有之字。

知不知章第七十一　二十八言

【章旨】此章、前章の意を承けて和光の德を言ふ。

知不知上。不知知病。夫惟病病。是以不病。聖人不病。以其病病、是以不病。

【譯讀】知りて知らずとするは上なり。知らずして知るとするは病なり。夫れ惟病を病とす。是を以て病まず。聖人は病まず。其の病を病とするを以て、是を以て病まず。

【字義】○不知知病　病は患害を謂ふ。○病病　上の病は憂ふる義、論語雍也に堯舜其猶病諸の病に同じ、下の病は患害を謂ふ。

【直解】道を知りて居りながら、謙虛にして知らざる者の如くなるは、上等の德ある人なり。顏回が亞聖の身を以て少しも知つたか振を爲さず、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛（論語泰伯）とあるが如きは是れ也。されば孔子も顏回を評して一寸見ては愚なるが如くに見ゆれども、仔細

に觀察すれば、囘や愚ならず（論語子罕）とのたまひし所以なり。顏囘のみならず、孔子の大聖を以てすら自ら吾有知乎哉、無知也（論語子罕）とのたまへり、是に由りて之を觀れば、道の深遠なる、聖賢と雖も悉く之を知り盡すことは容易ならず、これ舜の大知を以てして、猶ほ問ふことを好みし所以なり、然るに凡人は道を知らざるに、知つたか振を爲し、人に問ふことを爲さず、自ら私智を用ひて妄作するは、實に憂ふべき患害と謂ふべき也、荀子（大略）に天下國有俊士、世有賢人、迷者不問路、溺者不問遂（遂は水中渉るべきの徑）亡人好獨（獨は獨り自ら其の計を用ふるを謂ふ）とあるは亦ここの不知知（シナラルトスルハナリ）病の意に同じ。夫れ唯上等の德ある人は、知らずして知つたか振をするは、人の患害なる事を心得て、其の患害に罹らざるやうに、豫め憂慮して之を防ぐ也。これを以て患害に罹ること無き也。抑も聖人は患害なきもの也、それは聖人は夙に知つたか振をする患害の患害たる所以を能く心得て、豫め其の患害を憂へて之に備ふるが故なり、是を以て終に患害なきを得る也。易（既濟）に君子思患而豫防之とあるは、亦此義に同じ。

【辨正】聖人不病以下は夫惟病病、是以不病と意味重複せり、蓋し古註の文字の誤りて本文に入りしものなるべし。

○河上公、以此爲愛己章。
○沈曰、此章貴不厭。

○大威上、奕有則字。至下弼無矣字。狹、奕作狎。厭上兩不、奕作無。自知下、自愛下、奕竝有而字。

民不畏威章第七十二　四十五言

民不畏威、大威至矣。無狹其所居、無厭其所生。夫唯不厭。是以不厭。是以聖人自知不自見。自愛不自貴。故去彼取此。

【章旨】此章、前章の不知の意を承けて、聖人が自ら其の知を見はさず、自ら身を貴しとせざるを言ふ。また第六十七章の不敢爲天下先の義を申明して、清靜謙後を以て治國の要道とする也、不厭の二字は此章の眼目なり。

【譯讀】民威を畏れざれば、大威至る。其の居る所を狹しとすることなく、其の生ずる所を厭ふことなし。夫れ唯厭はず。是を以て厭はれず。是を以て聖人は自ら知りて自ら見はさず。自ら愛して自ら貴しとせず。故に彼を去りて此を取る。

○論語(季氏)君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言。第二十一章、人之所畏、不可不畏。

【字義】○威　天命なり、次章の天網も其の意同じ。不畏威は論語(季氏)の小人不知天命、而不畏也とあるに同じ。○大威　人禍天刑の慘なるもの也。○狹　小なり。○所居　居は孟子(滕文公下)の居天下之廣居の居に同じ、身を安んずる所以なり、ここは清淨無爲を謂ふ。○所生　生は身を養ふ所以なり、謙後をいふ、謙後なれば、人と爭はず、安泰にして生きながらふることを得る也。○厭　怠りて棄つる也、物に退屈して嫌になる義。○是以不厭　不厭は猶ほ不見厭と言ふが如し、人の爲めに厭はれざるを謂ふ、夫唯不厭の不厭は自ら厭はざるを謂ふ、自他の別あり。○去彼取此　彼は其の所居を狹しとすると、其の所生を厭ふとを謂ひ、此は清淨無爲の道を謂ふ。

【直解】凡そ民たる者、天威卽ち天命を畏れず、惡を爲すこと至らざる所なければ、必ず刑戮其の身に加はるに至る、豈恐れざるべけんや。抑も清淨無爲の道は、實に人の安泰なる所居なり。又謙後にして爭はざるは、實に安全に此世に生存する所以の道なり。故に其の所居を狹しとすることなく、其の生ずる所以の道を厭ひて棄つることなく、各〻其の分を守り、其

○第七十七章、聖人爲而不恃、功成而不處、其不欲見賢。

の職に安んずるは、能く其の身を全うする所以の道なり。然るに凡人は欲多きが爲めに、其の所居を狹しとして、清淨無爲に安んずること能はず。其の生ずる所以の道を厭ひて之を棄て、天命を畏れずして妄進し、徒に私智を弄して非分を僥倖せんとし、以て禍を招き刑に觸るるに至るは、歎ずべきの至なり。夫れ唯有道の人は、生ずる所以の道を厭ひて棄つることなく、清淨無爲にして其の分に安んじ、謙後にして人と爭ふ事なし。故に人にも亦厭ひ嫌はるることなく、長く其の身の安泰なるを得る也。是を以て聖人は其の居る所、卽ち虛無自然の大道を知りて明かにすれども、自ら其の德の光を韜み晦まして外に顯はさざること、前に被褐懷玉とあるが如くし、自ら其の身を嗇み愛して、人に先だつことを欲せず、謙虛にして能く下り、自ら貴しとして高ぶるといふ事なき也。故に彼の凡人が天命を畏れずして、其の所居を狹しとし、其の生ずる所以の道を厭ひて、己が分に安んずること能はず、徒に私智に任せて躁進し、私欲を恣にして妄作するの病を除き去りて、此清淨無爲、謙虛にして爭はざるの道を取りたまふ。故に之を以て己を治むれば、常に安泰なるのみならず、之を以て民に臨めば、民も亦其の德に化して、國家は長久に太平なることを得るなり。

○河上公、以此爲任爲章。
○沈曰、此章言不敢者常得天。

勇於敢章第七十三　六十四言

【章旨】此章、前章を承けて、天命の畏るべく、報應の昭然たるを言ひて、人に敎ふるに輕忽にすべからざるを以てする也。

勇於敢則殺。勇於不敢則活。此兩者或利或害。天之所惡、孰知其故。是以聖人猶難之。

【譯讀】敢てするに勇なるときは則ち殺さる。敢てせざるに勇なるときは則ち活く。此の兩者は或は利あり或は害あり。天の惡む所、孰か其の故を知らん。是を以て聖人すら猶ほ之を難しとす。

【字義】○敢　敢爲なり、無理に推し通さんとする也。○勇　勇決なり。○殺　猶ほ死と謂ふが如し。○不敢　堪忍すること也。○利　活を謂ふ。○害　殺を謂ふ。

【直解】第一節、天道は敢てするに勇なる者を惡むを言ふ。すべて推し強くして爭を好み、進むべからざるに進み、勝つべからざるに勝たんとする

○第六十八章、善爲士者不武、善戰者不怒。
○第三十六章、柔勝剛、弱勝強。

が如く、無理を通すに勇なる者は、暴虎馮河の徒にして、却つて其の身を危くして犬死するに至るもの也、孝經に在醜而爭則兵といひ、第四十二章に强梁者不得其死とあるが如きは是れ也。されば子路の賢にして孔子猶ほ其の死を得ずと豫言したまふ、況や衆人をや。又論語述而に臨事而懼、好謀而成とあるが如く、能く豫め安危を察し、禍福を謹み、敢て無理なる事を爲さず、何事にも堪忍することに勇なる者は、身を全うし生を保つことを得る也。韓信が能く柔弱の道を守りて、屠中の惡少年の胯を潛りしが如きは、是れ其の證とすべし。若し此時韓信が怒に耐へずして爭ひ鬪はんか、衆寡敵せずして、徒に犬死せしならん。夫れ不敢に勇なると、敢てするに勇なると此兩つの者は、一は身を全うすることを得て利あり、一は身を殺して害あり、其の得失の懸隔は甚だ昭然たり。抑も慈仁の心絶えて無く、敢てするに勇にして爭を好み犬死する者は、唯人の之を惡むのみならず、天も亦之を惡むなり。されども天道は幽遠にして其の惡みたまふ所以を測り知る者なし、是を以て聖人の大德すら、猶ほ且つ之を知り難しとして、只管天命を畏れて之を敬ひ、何事にも堪忍して敢

てせざるに勇ならんことを欲したまふ也。

○天之道不レ爭而善勝、不レ言而善應、不レ召而自來。繟然而善謀。天網恢恢疎而不レ失。

○繟、奕作レ默。一作レ坦。攷正、失一作レ漏。

【譯讀】天の道は爭はずして而して善く勝ち、言はずして而して善く應じ、召かずして而して自ら來る。繟然として而して善く謀る。天網恢恢疎にして而して失はず。

【字義】○繟然　寬綽なる貌、翼註に舒緩也とあり。　○恢恢　大いなる貌、史記滑稽傳序に天道恢恢豈不レ大哉とあり。　○不レ失　漏失する所なき也。

【直解】第二節、前節に孰知二其故一とあるを承けて、其の故を言ふ。夫れ天の道は虛無恬靜にして爭ふことなくして善く勝つ者なり、故に一時惡人の凶餓熾んなる時は、姑くそれを見逃し置きて其の爲すが儘に任すと雖も、やがて其の勢の衰ふる時を待ちて之を亡ぼすやうにする也。これを爭はずして善く勝つといふ也。史記伍子胥傳に人衆者勝レ天、天定亦能勝レ人とあるは是れ也。又天には口なくして言はざれども、善人には福を與へ、惡人には禍を降して、其の感應少しも差ふことなきもの也、これを不レ言而善應といふ。孟子梁惠王下に戒レ之戒レ之、出乎爾者、反乎爾者也といひ、易文言に積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃とあるは是れ也。又天は人の招きて而る後に來るが如き者にあらず、故に我より招き請はざれども、自ら我が上に來り臨みて、行爲の善惡を照覽したまふ也。又天は人の如く事を爲すに急迫なる者にあらず、繟然として寬綽なるもの也。故に時として善人にして或は天道の是か非かを疑はしむることなきにしもあらずと雖も、其の善惡の應報は或は覿面に來ることあり、或は數十年の後に來ることあり、或は子孫の身に及びて來ることもあり。其の緩急遲速の差こそあれ、古より惡の永く榮えし例なく、必ず善に福し惡に禍することは、今符節を合するが如く、寸分も違ふことなく、其の巧に善く應報を謀ることは、到底人の思慮の及ぶ所にあらざる也、抑も王法は如何に密なるも、猶ほ幸にして誅を逃るる者あり、而るに天の網は廣大にして外なく、其の網の目は疎闊なれども、善因には必ず善果あり、惡因には必ず惡果

○第七十九章、天道無レ親、常與二善人一。

ありて、少しも網の目を漏れ失ふといふことなき也。彼の天の意に逆ひ敢てするに勇なる者が殺さるるも、畢竟この天の網に罹れる也、豈戒めざるべけんや。

○河上公、以此爲制惡章。
○沈曰、此章貴不殺。

○奕本、不畏死上、有常字。奈何作如之何其。得下無執字。敢下有也字。

民不畏死章第七十四　五十八言

【章旨】此章、前章の天道は言ふことなきも、而かも善惡の應報失ふことなきの旨を承けて、天下を治むる者は、常に天を敬ひ民を保つべく、殺を尙び以て慈を傷るべからざる旨を明かにす。

民不畏死、奈何以死懼之。若使民常畏死、而爲奇者、吾得執而殺之、孰敢。

【譯讀】民死を畏れずんば、奈何ぞ死を以て之を懼さん。若し民をして常に死を畏れしめて、而して奇を爲す者は、吾執へて而して之を殺すことを得ば、孰か敢てせん。

【字義】○奇、邪曲なり、王註に「詭異ニシテ羣ヲ亂ル、之ヲ奇ト謂フ」と。○孰敢　敢て違ふ者なきを言ふ。

【直解】第一節、君たる者は、仁政を施し、民をして生を樂みて死を畏れしめ、而る後に之を齊ふるに刑を以てすべきことを言ふ。夫れ生を樂み死を

畏るるは人情の常也。故に假令乞食をしても一日も長く此世に活きながらへんと欲する也。而るに民の死を畏れざるやうになるは、蓋し由りて來る所の原因ある也。租稅重くして酷吏の誅求に苦み、衣食給せずして饑寒の身に迫るやうになりては、君を怨み世を厭ひて、自暴自棄となり、死を畏るる心も自ら亡失し、終に法を犯して盜を爲し人を殺すに至る也。此の如く民が死を畏れざるやうに至りては、奈何ぞ死刑を以て之に臨むと雖も、之を懼し懲して改悛せしむるを得んや。死は固より覺悟の上なれば、民は刑戮を懼れて惡を改め善に遷ることなかるべき也。かくなりては、最早法律の權威もなく、世は益〻衰亂するに至るべき也。「之に反して若し上たる者つとめて仁政を施し、租稅を輕くし、民の衣食をして常に豐かならしめば、民皆其の居に安んじ、生を樂みて死を畏れ、身を慎みて廉恥を重んずるやうになる也。第八十章に使民重死而不遠徙と」あるも同じ事をいへるなり。此の如くにして猶ほ且つ法を犯し邪曲を爲す者あらば、吾其の者を執へて之を殺すことを得ば、誰か敢て法に違ひて邪惡を爲す者あらんや。されば民の死を畏るると、死を畏れざるとは、實に治道の樞要にして、治亂興亡の岐るる所なり。民の死を畏るるの至は、道に遺れたる物を拾はず、天下安寧にして、刑措きて用ひざるに至り、其の死を畏れざるの極は、禍亂漸く長じて、國家衰亡するに至る。豈深く戒慎せざるべけんや。薛註に「我ガ朝太祖皇帝道德經序ニ曰フ、朕卽位ヨリ以來、前代哲王ノ道ヲ知ルナシ(中略)一日道德經ヲ見ルニ(中略)民不畏死、奈何以死懼之トアリ、是時ニ當リテ、天下初メテ定マリ、民頑ニシテ吏弊ナリ、朝ニ十人ノ棄市アリト雖モ、暮ニ百人ノ仍ホ之ヲ爲スモノアリ、此ノ如キ者ハ、豈經ノ云フ所ニ應ゼザランヤ、朕乃チ極刑ヲ罷メ、而シテ之ヲ囚役ス、年ヲ逾ヘズシテ朕ガ心減ズ、朕斯經ハ乃チ萬物ノ至根、王者ノ上師、臣民ノ極寶ニシテ、金丹ノ術ニアラザルヲ知ル也ト、於戲太祖ハ蓋シ天縱ノ大聖人ナリ、故ニ其ノ聰明叡智言ヲ知ルノ奥キコト此ノ如シ、亶聰明作元后書經泰誓トハ太祖ノ謂ナリ、仁人之言、其利博哉左傳昭公三年トハ老子ノ謂ナリ」とあり。太祖の如きは善く老子を讀む者と謂ふべき也。

○突本、夫代司殺者之夫作而。

常有司殺者殺。夫代司殺者殺。是謂代大匠斲。夫代大

是謂、無謂字。手上、有其字。

○莊子〔庚桑楚〕爲不善乎顯明之中者、人得而誅之、爲不善乎幽閒之中者、鬼得而誅之。

匠斲者、希有不傷手矣。

【譯讀】常に司殺の者ありて殺す。夫れ司殺の者に代りて殺す。是を大匠に代りて斲ると謂ふ。夫れ大匠に代りて斲る者は、手を傷らざることあるは希し。

【字義】○司殺者　造物卽ち天をいふ。○大匠　大工の棟梁卽ち都料匠なり。

【直解】第二節、聖人は人を殺さざることを貴び、專ら之を天に委ぬることを言ふ。世の中に邪惡を爲す者あれば、常に殺すことを司る者ありて、冥冥の中に照覽して之を殺す也。殺すことを司る者とは、卽ち天を斥していふ。前章の天網恢恢疎而不失とあるは是れ也。夫れ天地間の萬物は、之を生ずるも、又之を殺すも、皆天の爲す所なり。卽ち草木の類も、春に當りて之を生じ、秋に至りて之を殺す。又人も生あれば必ず死あり、生殺の權はすべて皆天の主宰する所にして、如何程人智が開け、科學が進みても、人力にては一草一木の微と雖も發生せしむる事は到底も出來ざる也。

抑も人と人とは貴賤上下の懸隔こそあれ、其の本は同等の者なり。すでに人が人を生ずる力なければ、亦人が人を殺すの權なきことは、自明の理なり。而るに刑法を設けて人を殺すは、自然の道に背くもの也。されば人が司殺者たる天に代りて人を殺すの非理なることは、之を物に譬ふれば、描工が大匠卽ち天下に二人となき名匠に代りて木を斲るに同じく、其の手を傷けざる者は鮮し。故に天に代りて人を殺す者は、其の禍必ず己の身に及ぶもの也、豈恐れて愼まざるべけんや。是れ老子の死刑廢止論なり。されば周禮などにも死刑を行ふことは最も之を愼重にし、重罪犯人にして、死刑に處すべき者あれば、天子自ら外廳に臨み、大臣悉く會同の上にて、其の罪人を呼び出し、天子親ら罪狀を訊問せられ、大臣中一人にても之が活路を求むるの論を爲す者ある時は、直ちに之を採用して其の死刑を減じたまふ、然れども萬萬已むことを得ずして死刑に決すれば、天子は深く自ら己の不德にしてかかる重罪人を出したることを責め、天に對して畏るる所あり、愈刑戮を行ふ日に當りては、平日の御膳を減じ、音樂を停止せられて、專ら謹愼の意を表したまふ也。

○河上公、以此爲貪損章。

○奕本、飢下、有者字。多下有也字。治下、有者字。爲下、有也字。死下、有者字。以其求生之厚作以其上求生生之厚也。以生爲下、有貴字。貴生下有也字。

民之飢章第七十五　五十三言

【章旨】此章、無爲自然にして淡泊無欲にあらざれば生を養ふこと能はざるを言ひ、人爲を以て生を養ふの非を論ず。

民之飢、以其上食稅之多、是以飢。民之難治、以其上之有爲、是以難治。民之輕死、以其求生之厚、是以輕死。夫唯無以生爲者、是賢於貴生。

【譯讀】民の飢うるは、其の上の稅を食むことの多きを以て、是を以て飢う。民の治め難きは、其の上の爲すことあるを以て、是を以て治め難し。民の死を輕んずるは、其の生を求むることの厚きを以て、是を以て死を輕んず。夫れ唯生を以て爲すこと無き者は、是れ生を貴ぶに賢れり。

【字義】○食稅之多　聚斂することの甚だしき也。○有爲　無爲なること能はず、智を用ひて國を治むるをいふ。○求生之厚　生は生養なり、

○第五十三章、朝甚除、田甚蕪、倉甚虛。

○第五十七章、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸。

自ら身を愛養するに過ぐる也。○賢　勝なり。○貴生　生を貴びて厚くする也、第五十五章の益生曰祥の益生に同じ。

【直解】耕して食ひ、織りて衣る、黎民飢ゑず寒えず、是れ上古太平の民の有樣なり。而るに近世に至りて下民の飢餓に苦むは、畢竟在上の人が、種種なる施設を爲すが爲めに、國用足らず、隨つて租稅を食むことの餘りに多く、民は一年中骨折りて收穫せし物も、皆之を上に奉り、殘るところは幾何もなく、困窮して終に飢うるに至る也。民飢うるに至れば、羣盜四方に起り、終に國を亡ぼすに至る。苛斂誅求の害は、實に寒心すべきの至なり、されば貞觀政要に太宗謂侍臣曰、爲君之道、必須先存百姓、若損百姓以奉其身、猶割股以啖腹、腹飽而身斃とあるが如きは、能く治國の要道を知る者と謂ふべき也。又第三章に爲無爲、則無不治とあるが如く、民はもと純朴にして無智なる者なり、故に上たる人、無爲にして妄りに干涉することなければ、自然に世は無事太平に治まることを得る也。而るに民の邪惡にして治め難きに至る所以は、上たる人無爲なること能はず、有爲にして施設する事多く、智術を以て國を治むるが故に、民の機智も漸く

○第五十章、民之生、動之二死地一、亦十有レ三、夫何故、以二其生一レ生之厚一。
○第三章、虚二其心一、實二其腹一、弱二其志一、強二其骨一、常使二民無知無欲一。

開け、巧詐爭ひ起り、狡猾邪惡の小人天下に滿つるに至る、是を以て治め難き也。以上は政治上に就きて無爲なること能はざるの害を述ぶ。以下は養生に就きて有爲の害を言ふ。夫れ上古純朴の世は人人皆其の分を守り、其の疏食をも甘しとし、其の粗服をも美なりとし、其のいぶせき居所をも安しとして滿足し、其の風俗を樂しとし、其の死を重んじて遠く徙ること無し。而るに民が其の死を輕んずるに至る所以は、上たる人、利欲を以て民に先んずればこそ、民も亦それに見習ひて厚く生活を爲さんことを求め、富貴利達を求むる爲めには、智巧を爭ひ、心身を勞し、終生營營として一日も其の土に安んずること能はず、或は萬里の波濤を凌ぎ、或は萬疊の山岳を跋渉し、利欲の爲めには可惜身命を喪ふをも辭せざるに至るなれ。是を以て民皆其の生命を輕んずるに至る也。抑も人の生を厚くせんことを求むるは、己が生を貴ぶに因ると雖も、生を貴びて日常の生活を手厚くせんが爲めに、心身を勞して止足することを知らざれば、反つて死を輕んずるに至ること上述の如くなれば、以て人は皆慾の爲めに身を殺すに至る者にて、無慾は反つて長生の道たる所以を知るべき也。故に夫れ唯恬淡無爲にして、自然の儘に任せ、富貴利達を欲することなければ、それが爲めに身命を喪ふ憂もなく、自ら長生することを得べし。是れ彼の生養を貴び反つて身命を喪ふに勝ること萬萬なりと謂ふべき也。林註に曰ふ「凡ソ人自ラ愛スルニ過グレバ、反ツテ以テ其ノ身ヲ喪フ、飲食太(ハナハ)ダ多ケレバ、亦能ク病ヲ生ズ、此レ其ノ一ナリ、自ラ愛シ自ラ養フニ過ギテ以テ生ヲ謀ラント欲ス、故ニ生ヲ求ムルノ厚キトイフ、輕(カロガロ)シク其ノ身ヲ用ヒテ以テ自ラ死ヲ取ル、故ニ死ヲ輕ンズト曰フ、其ノ身ヲ忘レテ而シテ後ニ身存ス、故ニ無以レ生爲(キテアラスコトハ)者、賢於(レリ)貴生(ナニヲ)ト曰フ云云」此解簡にして盡すと謂ふべき也。

○河上公、以此爲戒彊章。

○奕本、無萬物二字。

人之生章第七十六　五十七言

【章旨】此章、柔弱の貴ぶべきを言ひて、血氣の強を戒む。

人之生也柔弱。其死也堅強。萬物草木之生也柔脆。其死也枯槁。

【譯讀】人の生るるや柔弱なり、其の死するや堅強なり。萬物草木の生ずるや柔脆なり。其の死するや枯槁す。

【字義】○脆　輭なり。　○枯槁　槁も亦枯なり、潤澤竭きて堅強となる也。

【直解】第一節、人物草木を以て喩と爲して、柔弱の貴ぶべく、剛強の戒むべきことを言ふ。すでに第十章にも專氣致柔能如嬰兒乎とあるが如く、赤子の生るるや、天地沖和の氣在るが故に、其の筋骨は甚だ柔弱にして、屈伸も自由なる也。而るに人の死するや沖和の氣亡ぶるが故に、其の身體四肢、堅く強張りて屈伸すること能はざるやうになる也。それと同じく萬物草木も其の萌芽は皆柔輭なるもの也。而るに其の死するや、枯れて

○奕本、兩徒下、竝有也字。兵強下有者字。共作兵。強大處下、作故堅彊者處下。

潤澤も竭き、堅強にして折れ易くなる也。諺に柳の枝に雪折なしといふも、其の生氣の十分に滿ちたる時の事なり、枯るれば堅くなりて容易に手折ることを得べき也。

故堅強者死之徒。柔弱者生之徒。是以兵強則不勝。木強則共。強大處下、柔弱處上。

【譯讀】故に堅強なる者は死の徒なり。柔弱なる者は生の徒なり。是を以て兵強きときは則ち勝たず。木強きときは則ち共す。強大は下に處り、柔弱は上に處る。

【字義】○徒　類なり。　○共　平聲、供に通ず、木の強きは匠人の爲めに伐られて用に供せらる。一說に列子黃帝又淮南子原道訓に引く所の老聃曰、兵彊則滅、木彊則折の語あるに從ひて共を折に改むべしとの說あれども、必ずしも改めず、共にても通ず。　○強大　根幹なり。　○柔弱　枝葉なり。

【直解】第二節、前を承けて柔弱の貴ぶべきを言ふ。それ故に物事は何に限

○第七十八章、天下柔弱、莫レ過二於水一、而攻二堅強一者、莫二之能勝一。

らず、堅強なるは死の類にして、柔弱なるは生の類なり、第三十六章に柔勝レ剛、弱勝レ強とあり、第四十二章に強梁者不レ得二其死一とあると并せて考ふべき也。是を以て兵も餘りに強きは猛威を奮ひ過ぎて人懷かず、反つて最後の勝算を得ざるもの也。楚の項羽、木曾義仲などの敗亡せしは其の證とすべし、第六十七章に慈以戰則勝、また第六十八章に善爲レ士者不レ武とあると并せて考ふべき也。それと同じく木の強きは則ち匠人の爲めに伐られて棟や柱や土臺の材に供せられて上より壓へ付けらるる也。すべての事物、強大なる者は下に處りて重荷を負ふこと樹木の根幹の如く、柔弱なる者は上に處りて安きこと樹木の枝葉の如きもの也。嚴君平曰ふ「天地の理、小ハ大ヲ載セズ、輕ハ重ヲ載セズ、故ニ強人ハ王タルヲ得ズ、強木ハ上ニ處ルコトヲ得ズ」

○河上公、以レ此爲二天道章一。
○沈曰、此章貴レ損二有餘一。
○奕本、弓下、有二者字一。乎、作レ歟。

天之道章第七十七　七十九言

【章旨】此章、天道は盈を惡みて謙を好むことを言ひ、以て聖人天に法りて有餘を損することを說く。

○天之道、其猶張レ弓乎。高者抑レ之、下者擧レ之。有レ餘者損レ之、不レ足者補レ之。

【譯讀】天の道は、其れ猶ほ弓を張るがごときか。高き者をば之を抑へ、下き者をば之を擧ぐ。餘ある者をば之を損し、足らざる者をば之を補ふ。

【直解】第一節、弓を借りて、天道は平均を貴ぶことを言ふ。天の道はそれ猶ほ弓を張るが如き歟、凡そ弓を弛ぶる時は其の體を俯すれば、弭が上に在りて弦が下に向ふ。弓を張る時は之に反して弦が下に向ひて弦が上に在り、是れ弦の高き者を抑へて下に向はしめ、弦の下き者を擧げて上に在らしむる也。天の道も宛もそれと同じく、餘ある者は之を損し減すこと、其の弦を抑へて之をして下くならしむるが如くし、其の足らざる

を補ひ益すことは、其の弱を擧げて之をして高からしむるが如くする也。易謙卦に天道虧盈益謙とあるも亦此意なり。

○天之道、損有餘而補不足。人之道則不然。損不足以奉有餘。

【譯讀】天の道は餘あるを損して而して足らざるを補ふ。人の道は則ち然らず。足らざるを損して以て餘あるに奉ず。

【直解】第二節、衆人は天道に法らざるを言ふ。夫れ天の道は一視同仁にして民をして平均にして一の如く、有餘と不足との一方に偏せしむることを欲せず、故に其の意常に餘ある方をば損し減して、足らざる方をば補ひ益すに在る也。而るに人の道は則ち然ること能はず、人は慾あるが爲めに、足らざる者を損して、餘ある方に奉ずることを爲す也。卽ち天下の足らぬ勝なる貧民の膏血を浚へて、以て一人の富みて餘ある君に奉ずることを謂ひて、深く苛斂誅求の不可なることを言ふ也。さて此不都合なる事柄は、唯に君民の間に行はるるのみにあらず、民間に在りても

亦然り、故に貧者は常に財足らずして、今日の生活にさへ困窮し、祖先傳來の田畑などを抵當として富者より金を借り、期限に至れば利足を添へて返濟する也、若し返濟すること能はざれば、其の田畑は富者の所有に歸するが故に、貧者は益〻貧となり、富者は益〻富みて餘あるに至る也、彼の天道の有餘を損して、不足を補ふに相反することの甚だしきは、歎ずべき事ならずや。

○孰能句、奕作孰能損有餘而奉不足於天下者。李道純曰、中加不足二字者非。唯有道者、作其惟道者乎。處、奕作居。賢下、有耶字。

孰能有餘以奉天下。唯有道者是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢。

【譯讀】孰か能く餘ありて以て天下に奉ずる。唯有道の者なり。是を以て聖人は爲して而して恃まず。功成りて而して處らず。其れ賢を見すことを欲せざるか。

【直解】第三節、聖人は能く天道に法り、謙讓の德を守ることを言ふ。今や戰亂息む時なく、天下に道なき事久し、此時に當りて誰か能く倉庫を發きて餘ある財を散じ、以て天下の萬民に奉じて之を賑恤することを爲す

○第七十二章、聖人自知不自見、自愛不自貴。

者ぞ。唯有道の君のみ獨り之を爲すことを能くするのみ也。若し能く此の如くならんか、財散ずれば民聚るの道理にして、天下の萬民之に歸服し、其の國勢愈隆盛となるべき也。書經武成に散鹿臺之財、發鉅橋之粟、大賚四海、而萬民悅服とあるは其の證なり。其の己の有餘を損して人の足らざるを補ひ益す事を能くするは、畢竟無欲にして謙讓の德あるに本づかざるはなき也。周易謙卦に地中有山謙、君子以裒多益寡とあるは是れ也。」これを以て聖人は天道に法り、常に謙抑を守りて、盈滿に居ることを欲せず。其の身を出して以て天下の勞に任ずれども、其の勞を恃みて誇ることを爲さず、勞して其の功を成し遂ぐるも、亦自ら其の功の上に居らず。これ皆謙虛にして己が賢能を顯はすことを欲したまはざれば也。第四十八章に所謂爲道日損、損之又損、以至於無爲とあるは是れ也。

○河上公、以此爲任信章。

○奕本、天下八字、作天下莫柔弱於水。勝作先。易之下、有也字。

天下柔弱章第七十八　六十六言

【章旨】此章、通篇柔弱の貴ぶべきことを言ふの結論にして、人の此意を知りて能く實行せんことを欲する也。

天下柔弱、莫過於水。而攻堅强者、莫之能勝。以其無以易之。

【譯讀】天下の柔弱は、水に過ぐるはなし。而して堅强を攻むる者は、之に能く勝つことなし。其の以て之に易ふること無きを以てなり。

【字義】○易　代なり。

【直解】第一節、水を借りて柔の剛に勝ち、弱の强に勝つ所以を明かにす。夫れ天下に柔弱なる者多しと雖も、水に過ぎたる柔弱なる者とては、無き也。而して堅强なる者を攻むるに、水に能く勝ちて水より愈る者はあらざる也。大は則ち大船を覆し、大石を漂はし、大廈を流し、堅城を陷れ、高陵をして池と爲らしめ、深谷をして丘と化せしむるも、皆水の力なり、細は

則ち金を鍛し、玉を磨き、革を鞣すも皆水の力に資せざるはなき也、所謂泰山の霤は石を穿ち、千丈の堤も蟻穴の漏るるより敗るる喩の如く、柔弱の剛強に勝つ勢の熾なることは、天下に柔弱なる者少からずと雖も、水に代ふべき物とてはなき也。第四十三章に天下之至柔、馳騁天下之至堅とあるは是れ也。

○奕本、弱柔兩句、倒轉易地。知下、有而字。

弱之勝強、柔之勝剛。天下莫不知、莫能行。

○奕本、聖人下、有言字。稷下、有之字。是謂天下王、作是爲天下之王。反下、有也字。

【譯讀】弱の強に勝ち、柔の剛に勝つ。天下知らざることなくして、能く行ふことなし。

【直解】第二節、前節を承けて、衆人は水に如かざるを言ふ。されば弱の強に勝ち、柔の剛に勝つの理は、自ら明かにして天下の人人皆之を知らざる者なし、然れども凡夫の悲しさ、私慾の爲めに心昏くなりて、能く此柔弱の道を實地に踐み行ふことなきは、歎ずべき事ならずや。

故聖人云。受國之垢。是謂社稷主。受國之不祥。是謂天下王。正言若反。

【譯讀】故に聖人云ふ、國の垢を受く。是を社稷の主と謂ふ。國の不祥を受く。是を天下の王と謂ふ。正言は反するが若し。

【字義】○垢　垢は汚辱の義、恥なり、左傳宣公十五年に諺曰、川澤納汚、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、國君含垢、天之道也とある垢に同じ、莊子天下篇に老聃曰、知其雄、守其雌、爲天下谿、知其白、守其辱、爲天下谷、人皆取先、己獨取後、曰受天下之垢とありて、郭象の註に「雌・辱・後・下ノ類ハ皆物ノ所謂垢ナリ」とあり。王侯の自ら謙して孤寡不穀と稱する如きも、亦國の垢を受くと謂ふべき也。

○社稷　社は土の神を祀り、稷は五穀の神を祭る壇なり、國は土穀に資りて以て人を養ふなり、故に轉じて國家の義とす、社稷主は國君を謂ふ。

○不祥　祥は善なり、不祥は垢といふと其の義同じ、韻を押む爲めに文字を換へたるまで也。

【直解】第三節、聖人は能く柔を以て剛を制することを謂ふ。上述の如くなるを以て、聖人は常に身を以て天下の谷となり、自ら孤寡不穀と稱して謙遜し、國のよごれたるもの、卽ち一切の汚辱を皆受け容れたまふ。大王の獯鬻に事へ、句踐の吳に事ふるが如きは是れ也。されば之れを眞

○第二十八章、守其辱。第六十一章、大國者下流。

○第八十一章、信言不美。

に國家の主とは謂ふなれ、又聖人は常に身を以て天下の谿となり、自ら卑下して其の雌を守り、國の不善卽ち屈辱過咎などを悉く身に引き受けたまふ。湯王の葛に事へ、文王の昆夷に事へしが如きは是れ也。されば こそ眞に天下の王とは謂ふなれ、弱の强に勝ち、柔の剛に勝つこと此の如し、殷の湯王が萬方罪あらば、罪朕が身に在らんといひ、後漢の光武帝が嘗て我は天下を治むるに柔道を以てすといひしが如きは、皆此節の義に合するもの也。すべて虛無自然の道に合する正しき言論は、俗人の言ふ所とは反對なるが如し、何となれば俗人は唯强き者が弱き者に勝ち、剛き者が柔かなる者に勝つと思ひ居れり、又俗人は勝つことを樂み、負くることを恥づるの强たる事を知りて、羞を包み恥を忍ぶの眞の强にして益あることを知らず、故に正しき言論は俗人の考とは何時も相反するが如し。第六十五章に玄德深矣遠矣、與物反矣、乃至於大順とあるは是れ也、吁是れ正言の俗耳に入り難き所以にして、誠に歎ずべきの至ならずや。

○河上公、以此爲任契章。
○沈曰、此章貴無怨。

○有德上、奕有故字。

和大怨章第七十九　四十言

【章旨】此章、聖人人を待つに寛恕を以てし、無心にして恩を施せども報を責めざるを言ふ、これ蓋し當時利を計る者の爲めに發せし也。

和大怨必有餘怨。安可以爲善。是以聖人執左契而不責於人。有德司契、無德司徹。天道無親。常與善人。

【譯讀】大怨を和すれども必ず餘怨あり。安んぞ以て善と爲すべけん。是を以て聖人左契を執りて而して人に責めず。有德は契を司り、無德は徹を司る。天道は親なし。常に善人に與す。

【字義】○左契　契は券なり、一枚を二分し、左契は借りたる者持ち、右契は貸したる者持つ、左契は引き合はせるまでの者なり、右契はそれにて責め求むる也、執左契は人に責め求むる所なき也。○有德司契　契は左契なり、上文によりて左の字を省きたる也。○徹　明なり、明白を以て主と爲す也。恩讐分明の謂なり。○無親　私親なきを謂ふ。○與　助

くる也。

【直解】恩と怨とは兩ながら心に忘るるを善しとすれども、兎角衆人はさつぱりと心に忘るること能はざるもの也。されば大いなる怨ある者は、一旦人の仲裁によりて和合し、表面は美くしく見ゆれども、心の底には必ず怨の餘る者ありて、全くさつぱりと心に相忘るること能はざるもの也。これ何ぞ善と爲すべけんや、只始より人の怨なきやうに心掛くべき也。是を以て聖人は人に接するに寛恕を專らにし、其の己に在る者を盡して、人の至らざるを責めず。譬へば金錢の貸借にても聖人は左契の方を執りたる債務者の如く、人に責め求むるといふ事なき也。故に人より怨を招くといふことなく、心常に安泰なることを得る也。斯れ乃ち眞に善と爲すべき也。論語（衛靈公）に子曰、躬自厚、而薄責於人、則遠怨といひ、中庸に正己而不求於人、則無怨とあるは皆此義と合せり。德ある者は上述の如く左契を主る者の如く、其の量廣くして衆を容れ、人の至らざるを責め咎むること無し、而るに德なき者は、之に反して何事も明白を主とし、恩と讐とを分明に區別して、恩ある者には恩を以て之に報い、讐ある

○第七十三章、天網恢恢、疎而不失。

者には讐を以て之に報ゆることをきつぱりとし、何處までも人の至らざるを責め咎むる也。抑も天道は公平にして私なし、故に誰を特別に親むといふことなく、常に善人卽ち左契を主りて人を責むることなき有德の者に與し、萬事につきて之を助けて福を降したまふ也。

【辨正】先儒左契は債權者之を藏し、右契は債務者之を藏し、債權者は左契を執りて催促すと爲すは全く誤れり。右契は債權者の以て責取すべきもの、左契は債務者の手に在り、勘合を待つのみ、左契は雌の類なり、故に之を執りて敢て人を責めざる也、王元澤曰く「史記ニ云フ操右契以責事、禮記ニ云フ、獻田宅者、操右契ト、則チ左契ハ責ヲ受クル者ノ執ル所タルヲ知ル」と。

○河上公、以此爲獨立章。○沈曰、此章論至治。

○有什伯之器上、奕有民字。與、河上作車。使民復、民弼作人。用之下、奕本有至治之極、民各六字。奕居作俗。俗作業、民至上、有使字。往來上、有與字。

小國寡民章第八十　七十五言

【章旨】此章、通篇說く所の淸淨無爲の敎を治道に施さば、太古の至治に復することを得べし、是れ其の志願なる所以を言ひて收結と爲す。

小國寡民、使有什伯之器而不用。使民重死而不遠徙。雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之。使民復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗、鄰國相望、雞犬之聲相聞、民至老死不相往來。

【譯讀】小國寡民、什伯の器ありて而して用ひざらしむ。民をして死を重んじて而して遠く徙らざらしむ。舟輿ありと雖も之に乘る所なく、甲兵ありと雖も、之を陳する所なし。民をして復繩を結びて而して之を用ひ、其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の居を安んじ、其の俗を樂み、鄰國相望み、雞犬の聲相聞え、民老死に至るまで相往來せざらしめん。

【字義】○什伯之器　什伯は十百に同じ、人に十百するの器なり。卽ち其の材、什夫伯夫の長たるに堪ふる者をいふ、俞樾曰く、什伯之器ハ乃チ兵器ナリ、什伯ハ皆士卒部曲ノ名ナリ」と亦通ず。○甲兵　軍兵をいふ。○結繩　古未だ文字なかりし世には、大事には大繩を結び、小事には小繩を結びて心覺えに供せり、易繫辭下傳に上古結繩而治、後世聖人易之以書契とあり。○相望　竝びつづく義、左傳昭公二年の道殣相望の相望と同じ。○相聞　至りて近くして相應ずる也。孟子公孫丑上に雞鳴狗吠、相聞而達四境の相聞と同じ。

【直解】此章は老子衰周戰亂の世に生れ、文勝ちて事繁く、人人功利を貪り求め、風俗の頹敗極まれるを目擊して、深く之を慨歎し、特に淸淨無爲の道を以て之を救ひ、上古の至治に復せしめんと欲す、故に篇末において其の理想とする所を述べたる也。さて上古の世は多くの小國分立して、後世の如く大國といふ者はなかりし也。後世に至りて大國の興りたるは、人人利欲を貪り求め、互に攻伐を事とし、力强き者は弱き者を兼ね幷せて、次第に其の領土を擴張せしに由る也。されば古代の如く國小にし

て民寡きも、人人恬澹無欲にして、貪り求むる心なく、風俗至りて淳樸にして、事事簡素を尚び、無爲にして自然に治まれば、たとひ其の材器は什夫伯夫の長となるに堪ふる程の人物ありとも、其の智能を用ふる所なき也。第三章に使夫知者不敢爲也、爲無爲則無不治とあるも亦此意なり。かかる至治の世は、民をして其の生を樂み其の死を重んじて遠く四方に轉徙するが如きことなからしむる也、重死とは以其求生厚是以輕死、第七十五章の輕死の反對なり。それ民は貪り求むる念熾んにして、己が生活を手厚くせんことを欲するが故に、死を輕んじて知らぬ他國に商旅し、利を逐ふ爲めには、天涯地角到らざる處なく、或は瘴癘を犯して病に罹り、或は水土に習はずして夭折するに至る也。然るに今民をして淳樸にして貪り求むる念なく、得難きの貨を羨み欲する心を生ぜざらしむれば、人人皆死を重んじて其の身を自愛し、生涯其の鄉土に安住して、一家團欒の樂を享くることを得る也。すでに貪り求むる心なければ、遠く利を逐ひて商販に、從事することもなく、隨つて舟車ありとも之に乘りて他國へ行くことを用ひざる也。すでに戰爭することなければ、軍兵ありとも、之を陳ねて攻伐することを用ひざる也。民淳樸にして事簡に、誠實にして僞ることなければ、上代の如く復繩を結び之を用ひて約信と爲すとも、それに違ひ背くことなく、人人其の分に安んじて、其の疏食をも甘しとして、舌鼓を打ちて食ひ、其の惡衣をも美くしとして喜び服し、其のいぶせき伏屋をも安しとして住み、其の陋巷の風俗をも住めば都として樂み、遠く他に徙ることを爲さず、四鄰の國國は壤を接して相竝び、其の家家に畜ふ所の雞犬の聲は、近く相聞ゆれども、民は自ら止足する所を知りて、他に欲求する所なければ、老いて死するに至るまで互に相往來することもなく、極めて安穩に世を過ごすことを得しむべき也。これぞ上代無爲にして自ら化せし太平至治の光景なる。

○河上公、以レ此爲二顯質章一。

○善者・辯者、奕作二善言・辯言一。

信言不美章第八十一　五十七言

【章旨】此章、通篇立言の旨を結び、以て老子が立教の主意を明かにする也、老子の教、無爲にして爭はざるを貴ぶ、故に篇末に於て爭はざるを貴ぶ所以を言ひて總括と爲す。

信言不レ美。美言不レ信。善者不レ辯。辯者不レ善。知者不レ博。博者不レ知。

【譯讀】信言は美ならず。美言は信ならず。善者は辯ならず。辯者は善ならず。知る者は博からず。博き者は知らず。

【字義】○信言　信實の言なり。○美　旨き也、味ある義。○知者　天の道を知る者なり。

【直解】第一節、立言の要旨を言ふ。人の言には信言あり、美言あり、信言は信實の情を言ひて少しも飾りつくらふ所なきが故に、之を聞きても、格別旨き味なき也。第三十五章に道之出レ口、淡乎其無レ味とあるは是れ也。美言

は旨く巧に言ふ言なり、故に一寸聞くときは、如何にも味あるやうなれども、元來虛を飾りたる言にて信實はなきもの也。又善き行ある者は、素朴を守り、躬行實踐を貴び、口に出して辯ずることは爲さざる者なり。彼の口に出して喋喋と辯ずる者は、却つて行の善からざるもの也。第二十二章に少則得、多則惑、是以聖人抱レ一、爲二天下式一とあるが如く、虛無自然の道は、至りて約なるもの也。故に道を知る者は、根本の原理を明かにして、以て、萬事に應用する也。故に必ずしも種種雜多の事に渉りて博く學ぶことを要せざる也、所謂少則得とは是れ也。論語里仁に子曰參乎、吾道一以貫レ之とあるも老子の抱レ一といへるも、歸する所は皆同じき也。然るに彼の博く學ぶ者は、種種の道具を澤山に竝べ立つるも、畢竟素人だましの學問にして、心は外に馳せて、文は、質を滅し、徒に博く渉ることを務めて、要約する所を知らず、散漫にして統紀なく、所謂多則惑とは是れ也。第四十七章に不レ出レ戸知二天下一、不レ窺レ牖見二天道一とあるは、則ちここの知者不レ博の義に同じく、其出彌遠、其知彌少とあるは、則ち博者不レ知の義に同じき也。以上三層の說、大抵一意なり、老子は平生信言を言ひて、美言を言はず、善

者を學びて、辯者を學ばず、學問も簡要切實なる道理を說きて、徒に博識を衒ひて、道具立を澤山にすること無し。故に通篇五千言、其の說く所は淡泊無味にして世俗に悅ばれず、下士の爲めに大いに笑はるる所以也。

○不、奕作無。

聖人不積。既以爲人、己愈有。既以與人、己愈多。

【譯讀】聖人は積まず。既く以て人の爲めにして、己愈有り。既く以て人に與へて、己愈多し。

【字義】○既　盡なり。

【直解】第二節、聖人は無欲にして、人の爲めにするは卽ち己の爲めにする所以たるを言ふ。さて老子の最も貴ぶ所は無欲なり、故に卷末に聖人の無欲を申言して總括と爲す。抑も俗人は欲多きが故に、終年營營として金錢財寶を積み蓄ふることに腐心すれども、聖人は之に反し、己の欲の爲めに財產を積み聚むることなく、盡く以て人民の爲めに用ひて、己の財產は愈有る也。盡く以て人民に散じ與へて、己の財產は愈多く增す也。何となれば國は民を以て本と爲す、民の富めるは卽ち國の富める也、國の富めるは卽ち君の富める也。仁德天皇が民の富めるは、卽ち朕の富める也とのたまひしも此意に外ならず。漢の文帝は屢、租稅を免除せられたれども、朝廷の倉廩府庫は益、富みて、京師の錢は巨萬を累ね、貫朽ちて校ふべからず、太倉の粟は陳陳相因り、腐敗して食ふべからざるに至れるは、これ其の證なり。是を以て聖人の積まざるは、卽ち大いに積む所以にして、人の爲めにするは卽ち己の爲めにする所以たるを知るべき也。老子戰國の世、苛斂誅求の慘狀を目擊して、深く之を憂慮す。故に卷末に於て君民一體の義を明かにす、其の用意極めて深切なりと謂ふべし、此書を讀む者、最も察せざるべからず。

○天之道、利而不害。聖人之道、爲而不爭。

【譯讀】天の道は利して而して害せず。聖人の道は、爲して而して爭はず。

【字義】○利　利水の利なり、之を通達する也。

【直解】第三節、天道と聖人の道とは合して一と爲ることを言ひて全書の旨を總括す。而して不爭は老子の最も貴ぶところ、故に重ねて最後に於

て之を點出す。其の用意の最も深きを見るべき也。さて天の道は卽ち天の元氣にして、常に萬物を生成して已まず、故に萬物を利することを爲して、之を害することを爲さざる也。彼の秋冬に至りて草木の凋み落つるは、之を害するが如くに疑はるれども、實は然らず、更に生氣を內に蓄へて、一陽來復を待ちて新に萌芽を發生せしめんが爲め也。是れ天地が萬物を生ずるの心なり。聖人の道は、天の道に法り無爲にして以て爲すが故に、敢て天下の先となることなく、人と功を爭ふことなけれども、萬民其の德に懷きて心服し、天下自ら平かなることを得る也。吳註に曰ふ「利ハ害ノ對、利アレバ則チ害アリ、天ノ道ハ利スト雖モ而カモ害セズ、利セザルヲ以テ而シテ之ヲ利ス、是ヲ以テ害セズ、爲スハ爭ノ端、爲スコトアレバ則チ必ズ爭フコトアリ、聖人ノ道ハ爲スト雖モ而カモ爭ハズ、爲サザルヲ以テ而シテ之ヲ爲ス、是ヲ以テ爭ハザル也」と。第六十八章に善用人者爲之下、是謂不爭之德、また第七十三章に天之道不爭而善勝とあり、不爭の二字は實に老子一部の神髓なり、夫れ唯爭はず、故に信言して美言せず、善者知者を學びて辯者博者を學ばざる也、論語八佾にも子曰、君子無所爭とあり、孔老の言、往往符節を合するが如し、學者宜しく反復玩味すべき也。

老子解義終

語句索引

語句索引例言五則

一　此索引は、老子中の語句の出處竝に其の意義を檢索せんと欲する者の便に供せんが爲めに輯めたるものなり。語句の排纂は、五十音順に從ひたれども、頭字の同じき者は、便宜一括して之を出だせり。

一　語句は成るべく原文の儘に之を出だしたれども、廻環讀すべき語句は之を國文に譯せり。例へば「見素抱樸」を「素を見はし樸を抱く」とし「爲無爲事無事」を「無爲を爲し無事を事とす」と譯して出だしたるが如し。

一　音讀・訓讀孰れにても差支なき語句は、煩を厭はずして、之を各部の條下に出だせり。例へば深根固柢（シンコンコテイ）と音讀して(し)の部に出だし「根を深（ふか）くし柢を固くす」と訓讀して(れ)の部に出だしたる類なり。

一　一語中に含める各品詞をも、細分して一一之を出だせり、これ明確なる記憶なき者の便に供せんが爲めなり。例へば「夫物芸芸、各歸其根」は原文の儘(そ)の部に出だしたる外、「芸芸」の熟語は(う)の部に「各歸其根」の下半句は(お)の部に「歸其根」は「其の根に歸る」と譯して(そ)の部に「根」は音讀して(こ)の部に、訓讀して(ね)の兩部に出だしたる類なり。

一　同一の語句、又は熟字の書中に散見せる者は、悉く其の條下に頁數を集め記したれば、彼此參勘の資と爲すべき也。

あ

阿　一三
奥　三六一
垢　四三八
皦かならず　八五
惡己　八
歟めんと　二二二
窪則盈　二三七
豈虚言哉　一四〇
哀者勝　四〇三
相去幾何　一三一
相往來せず　四四四
敢て寸を進めずして尺を退く　四〇一
敢てするに勇なるときは　四一六
敢てせざるに勇なるときは　四一六
敢て天下の先と爲らず　三九一
敢て爲さず　三七六
敢て以て強を取らず　一八五
普し　三一五
餘あり　二三六・三一五
餘あるを損して　四三四
餘あるに奉ず　四三四
餘ある者をば之を損し　四三三
安平泰　二〇九
殆からざる所以なり　一九七
殆からず　二六七・三〇二
爭はざるの德　三九八
爭はず　四五・四六・一四〇
爭はずして善く勝つ　四一八
新に成さず　九四
或下以取　三五八
或強或羸　一七九
或載或墮　一七九
或嘘或吹　一七九
或不盈　二七
或行或隨　一七九

い（ゐ）

夷　八四
夷道若纇　二四六
有せず　一五・二九九
有道者　四三五
有道者不處　一四九・一八八
有德司契　四四一
有之以爲利　六八
有生於無　二四〇
有無相生　一〇
有名萬物之母　三
猶兮其貴言　一〇八
猶兮若畏四鄰　九〇
威を畏れず　四一二
如何萬乘之主而以身輕天下　一五五
域中有四大　二九七
勢成之　一を抱く　五七
一を得たる者　二三一
一を得て以て清く　二三一
一を得て以て生じ　二三一
一を得て以て天下の貞たり　二三一
一を得て以て盈ち　二三一
一を得て以て寧く　二三一
一を得て以て靈なり　二三一
一生二　二五三
一穀を共にす　六六
安可以爲善　四四一
出生入死　二九〇
唯之與阿相去幾何　三一
古之所謂曲則全者　一四〇
古之極　二九八
古之所以貴此道者何　三六三
古の道を執りて以て今の有を御す　八八
古之善爲士者　九〇
古之善爲道者　三八一
古より今に及びて其の名去　一三四

言はずして而して善く應じ　四一八
言者不知　三三七
況於人乎　一四四
衣被　二〇五
家を觀　三一七
家を以て家を觀　三一七
家に修むれば其の德乃ち餘　三一五
今の有を御す　八八
陰を負ひて陽を抱く　二五三
飲食に厭き　三一〇
容乃公　一〇〇
入死　二九〇

う

魚不可脫於淵　二一四
動而愈出　三四
動善時　四六
失ふことなし　三七六

え（ゑ）

摶たず　三一〇
芸芸　一〇〇
怨に報ゆるに德を以てす　三六七
得與亡孰病　二六四
憂なし　一二一
銳　二八
銳を挫く　三一七
榮觀ありと雖も燕處して　一五九
嬰兒　五七
嬰兒に復歸す　一七〇
嬰兒の未だ孩せざるが如し　一二六
營魄を載せて　五七
窈兮冥兮　一三二
要妙　一六八
得難きの貨を貴ばず　一九・三七六
得難きの貨は　七一
得て而して賤くすべからず　三三九
得て而して疎んずべからず　三三九
得て而して害すべからず　三三九
得て而して親むべからず　三三九
得て而して貴くすべからず　三三九
得て而して利すべからず　三三九
益　二五三
遠曰反　一五四
淵を善くす　四七
淵乎似萬物之宗　二七
燕處超然　一五九

お（を）

擁而銳之不可長保　五一
敎父　二五七
畏れざる可からず　一二四
驚くが若し　七六
同出而異名　五
同謂之玄　五
各歸其根　一〇〇
己愈有　四五〇
己愈多　四五〇
終を愼むこと始の如くなれ　三七六
多藏必厚亡　二六四
多則惑　一三七
音聲相和　一〇

か

行妨げしむ　七一
作爲而不辭　一五
治まらざるなし　二四
治め難し　四二六
除　三一〇
巧を絶ち利を棄つれば　一一六
高下相傾　一〇
孝慈　一一・一一六
高以下爲基　二三六

剛に勝つ　二一四・二四三八
郊に生ず　二七四
毫末　二七三
孩　二八七
孩ぜず　二二六
楷式　二八三
介然　三〇九
解紛　二八
攘無臂　四〇一
耀かさず　三四三
學を爲せば日に益し　二八一
學を絶てば憂なし　二二
樂與餌過客止　二一〇
客となり　四〇一
客の若し　九〇
缺くるが若し　二六九
重れて德を積むと謂ふ　三四五
貸且成　二五一
下士聞て道大笑て之　二四四
難きことなし　三六八

暇隙　一六二
形なし　二四六
勝而不て美　一八九
褐を被て玉を懷く　四〇六
下德爲て之而有二以爲一　二二一
下德不失て德　二二一
下流　三五六
必作二於易一　三六七
必有二凶年一　二八二
必以て言下て之　三八五
必作二於細一　三六七
必以て身後て之　三八五
夫の知者をして敢て爲さざらし　二四
渝るが若し　二四六
合抱木生二於毫末一　三七三
甲兵ありと雖も之を陳する　四四四
甲兵を被らず　二九三
還ることを好む　一八二
含德之厚比二於赤子一　三二〇
甘露　一九六

輕則失て臣　一六〇
彼を去りて此を取る　七四・二二七・四一三
嗄れず　三二〇

き

奇　三五九
奇を以て兵を用ふ　一八二
奇物滋起　三三二
希　八四
希言自然　一四四
希聲　二四六
鬼　三五三
義　三二五
義を失ひて而して後に禮　三二五
義を棄つれば民孝慈に　二一六
久視　三四九
九層之臺起二於累土一　三二〇
氣を使ふを强といふ　三二三

氣を專らにし　五七
器を爲る　六六・一七四
器之用　六六
技巧　三三二
貴高　二三四
貴以て賤爲て本　二三六
忌諱　三三二
熙熙　二二六
歸根　一〇〇
歸する所なきが若し　二二六
兆さず　二二六
棄人なし　一六五
棄物なし　一六五
跂者　一四九
吉事尙て左　一九二
木强則共　四三一
歔歔爲二天下一渾二其心一　二八七
君　四〇六
君を失ふ　一六〇
金玉滿て堂莫二之能守一　五三

强　一八五・二〇〇・二〇五・二二三
强骨　二二
强大處て下柔弱處て上　四三一
强なること勿かれ　一八五
强に勝つ　二一四・四三八
强梁者不て得て其死一　二五七
狂を發せしむ　七一
鄉を觀　三一七
鄉を以て鄉を觀　三一七
鄉に修むれば其の德乃ち長　三一五
凶事尙右　一九二
凶年　一八二
拱璧　三六三
虛を致すこと極まれば　九七
虛言　一四〇
虛極　九七
虛心　三二
虛而不て屈　三四
極　三四八
曲則全　一二七・一四〇

居善て地　四六
邦に修むれば其の德乃ち豐　三二五
君子居則貴て左　一八八
君子終日行不て離て輜重一　一五九
君子器　一八九
軍に入りて甲兵を被らず　二九三
昧からず　八五
昧きが若く　二四六
昏きが若し　三三七
倉甚虛　七一
車之用　三六九
恢恢　三四
恍兮惚兮　四一八
曠兮其若て谷　三二三
荒兮其未て央哉　九〇
廣德若て不て足　二二四
過客止　二四六
攫鳥不て搏　三二〇
化而欲て作鎭一之以二無名之樸一　二二八
果而勿て驕　二一七
果而勿て强　一八五

果而勿て伐　一八五
果而已矣　一八五
果而不て得て已　一八五
寡民　四四四
寡欲　二一六
頑且鄙　一三〇
關鍵　一六二
官長　一七四
渙兮若二冰之將一釋　九〇
觀復　九七

け

徑　三〇九
契を司る　四四一
荊棘　一八二
雞犬之聲相聞　四四四
輕諾必寡て信　三六七
輕根　一五八

徼　四
缺缺　三三八
劇らず　三四二
玄　五
玄通　九〇
玄同　三二七
玄德　六四・二九九
玄德深矣遠矣　三八三
玄之又玄　五
玄牝之門是謂天地之根　三七
玄覽　五七
儉　三九〇
儉を舍てて且に廣からんとす　三九一
儉故能廣　三九〇
賢を見すことを欲せざるか　四三五
賢を尚ばざれば民をして　一九
堅强　四三〇
堅强を攻むる者は之に能く　四三七
堅强者死之徒　四三一
言を以て之に下る　三八五

言善信　四六
言有宗　四〇六
建言有之　二四六
建德若偷　二四六
儼兮其若客　九〇

こ

戶牖を鑿ちて以て室を爲る　六六
五音令人耳聾　七一
五色令人目盲　七一
五味令人口爽　七一
江海所以能爲百谷王者　三八五
孔德之容　一三二
功成事遂　一〇八
功成而不居　一五・二〇五
功成而不處　四三五
功成名遂身退天之道　五三

公乃王　一〇〇
枯槁　四三〇
黑　一七〇
國家昏亂有忠臣　一一
國家滋昏　三三二
谷神不死是謂玄牝　三七
孤寡不穀　二三六・二五三
心を虛にして亂れざらしむ　一九
心使氣曰强　三三三
心善淵　四六
志あり　一〇〇
志を天下に得べからず　一九〇
古始　八八
跨者　一四九
惚恍　八六
惚兮恍兮　八六
混一　一三二
混而爲一　八四
混成　四五〇
昏亂　四五〇
既以爲人己愈有　一〇八
既以與人己愈多　一〇八
事遂　二八三
事なきを以てす　二八三

事有君　四〇六
事に道に從ふ者　一四六
事善能　四六
此三者以爲文而不足　一一六
此道を保つ者　九四
此兩者同出異名　五
此の兩者を知るも亦楷式なり　三八三
此を取る　七四
此を以てすればなり　一三五
冰の將に釋けんとするが若く　九〇
根　三七・一〇〇
根柢　三四九
渾　二八七
渾兮其若濁　九〇
混一　八四
混而爲一　八四
混成　一五三
昏亂　一一
斯惡已　八
斯不善已　八

之を字して道と曰ふ　一五四
之を歙めんと將欲すれば　三一一
之を侮る　一〇五
之を育す　二九九
之を家に修むれば其の德　三一五
之を未だ有らざるに爲し　三七三
之を未だ亂れざるに治む　三七三
之を失へば驚くが若くす　七八
之を奪はんと將欲すれば　二一三
之を得れば驚くが若くし　七八
之を益して而して損す　二五三
之を長る　一〇五
之を覆ふ　二九九
之を聽けども聞くに足らず　二一〇
之を聽けども聞えず　八四
之を鄉に修むれば其の德　三一五
之を邦に修むれば其の德　三一五
之を形し　二九七
之を親み　一〇五
之を生じ之を畜ひ　六四

之を爵すること莫くして　二九八
之を損して又損し　二八一
之を長じ之を育し　二九九
之を亭し之を毒し　二九九
之を天下に修むれば其の德　三一五
之を搏ふれども得ず　八四
之を廢せんと將欲すれば　二一三
之を美とする者は是れ人を殺す　八九
之を譽む　一〇五
之を身に修むれば其の德　三一三
之を視れども見えず　八四
之を視れども見るに足らず　二一〇
之を迎へて其の首を見ず　八八
之を用ひて勤めず　三七
之を用ふれども既すべからず　二一〇
之を畜ひ　二九七
之を養ひ之を覆ふ　二九九
之を能く守ることなし　五三
之を弱くせんと將欲すれば　二一三
之に隨ひて其の後を見ず　八八

之に陳する所なし　四四四
之に仍く　三一一
是謂玄德　六四
是謂玄牝　三七
是謂惚恍　八六
是謂寵辱若驚　七八
是謂天地之根　三七
是謂不道　一八五
是以不去　一五
是以聖人處無爲之事　二一
是以能敝不新成　九四
是以不我知　四〇六
惟恍惟惚　一三三

さ

左右すべし　二〇五
左契を執りて人に責めず　四四一
蛟作精之至也　三三〇

財貨餘あり　三二〇
祭祀不輟　三一三
宰せず　六四
細也夫　三七
壯則老　八六
躁君　七八
躁勝寒　三七
躁則失君　一八五
走馬を卻けて以て糞ふ　一五
喪禮を以て之に處るを言ふ　二一
挫銳　九四
割かず　四〇六
號而嗌不嗄和之至也　一三三
蓋さず　三二〇
坐して此の道を進むるに如　三六三
正まることなきか　三三九
察察　一三六・三三八
三公を置く　三六三
三十輻共一轂　六六
三生萬物　二五三

三寶 三九〇
舟輿ありと雖も之に乗る所 四四四
死を重んじて遠く徙らざら 四四四
死を輕んず 四二六
死而不亡者壽 二〇〇
死ぜず 三七
死矣 三九一
死地なきを以てなり 二九三
死地に之くもの 二九〇
死之徒 四三一
死之徒十有三 二九〇
食を母に求むることを貴ぶ 一三〇
時を善くす 四七
至堅 二五九
兕虎 二九三
兕無所投其角 二九三
司殺者 四二三
自然 一〇八・一四四・三七六
自然に法る 一五六
子孫以祭祀不輟 三一三
四大 一五五

し

四鄰を畏るるが如し 九〇
士たる者は武からず 三九八
輜重 一五九
質直者を渝 二四六
仁 三三五
仁を失ひて而して後に義 三三五
仁を絶ち義を棄つれば 一一六
仁を善くす 四六
仁義 一一
仁とせず 六六
神 三三
神器 三五三
神得一以靈 一七七
神無以靈將恐歇 三六三
神無以靈將恐歇 三三
眞 一三四・三一五
信あり 一三四
信を善くす 四六
信言不美 四四八
信ぜざることあり 一〇七
信寡し 九〇
信者吾信之 三六八
信不足焉有不信 二八五
臣を失ふ 一〇七・一四六
甚を去る 一六〇
深根固柢 一七九
人主を佐くる者 三四九
進道若退 一八二
親なし 二四六
下知有之 四四一
祥 一〇五
象あり 三二三
常有欲以觀其徼 一三二
常道 四
常德乃足復歸於樸 一一
常德不忒 一七〇
常德不離 一七〇
常名 一七〇
常無欲以觀其妙 一
上義爲之而有以爲 四
上士聞道勤而行之 二三
上仁爲之而無以爲 二四四
上將軍處右 三三
上善若水 一九二
上德無爲而無以爲 四五
上德若谷 三三一
上德不德 二四六
上禮爲之而莫之應 二三一
生而不有 四四一
生而不辭 一五・六四・一九九
尙賢 一〇五
將欲 一九
奢を去る 一三二
爵 一七七・二二三
弱志 四
弱者道之用 一七〇
弱之勝强 一七〇
社稷主 二一四・四三八
壽 一
驟雨不終日 四三八
終日行不離輜重 二三二
終日號而嗌不嗄和之至也 一四四
衆人熙熙如享太牢 三三〇
衆人の惡む所に處る 一二六
衆人皆有以 四五
衆人の過ぐる所に復す 一三〇
衆人皆有餘 三七六
戎馬生於郊 一二六
衆甫 二七四
衆妙之門 一三四
守靜 五
主とならず 九七
主とならずして客となり 二〇五
醇醇 四〇一
繩繩兮不可名 二九八
繩約 三三八
乘乘兮若無所歸 八五
稱と爲す 一二六
辱爲下 二五三
辱の若く 七八
埴を埏して以て器を爲る 二四六
嗇に如くはなし 六六
知らずして知るとするは病 三四五
知不知上 四〇九
知者不言 四四五
知者不博 三三七
退くが若く 四四八
識るべからず 二四六
耳聾 九〇
七二

す

芻狗 三三
少則得 一三七
旣知其子復守其母 三〇二
旣得其母以知其子 三〇二
則可寄於天下 八〇
乃可以託於天下 八一
寸を進めずして尺を退く 四〇一

せ

正　二七一
正を以て國を治め　三三一
正言若〻反　四三八
正復爲〻奇　三三九
靜　一〇〇
靜曰〻復命一　一〇〇
靜を守ること篤し　九七
靜を以て下ることを爲す　三五六
靜篤　九七
靜爲〻躁君一　一五八
靜勝〻熱　二七一
精あり　二三二
精之至也　三一〇
逝曰〻遠　一五四
生を生とするの厚きを以て　二九〇
生を攝す　二九三
生を貴ぶに賢れり　四二六
生を益すを祥と曰ふ　三三三
生を以て爲すこと無き者は　四三六
生を求むることの厚きを以て　四三六
生之徒　四三一
生之徒十有〻三　二九〇
聖を絶ち智を棄つれば　二二六
聖人抱〻一爲〻天下式一　一四〇
聖人云　三三六・四三八
聖人用〻之則爲〻官長一　一七四
聖人執〻左契一而不〻責〻於人一　四四一
聖人不〻仁　三三
聖人猶難〻之　三六七・四一六
聖人之治　三三
聖人之在〻天下一歙歙　二八七
聖人之道爲而不〻爭　四五一
聖人被〻褐懷〻玉　四〇六
聖人處〻上而民不〻重　三八六
聖人去〻甚去〻奢去〻泰　一七九
聖人後〻其身一而身先　四一
聖人欲〻上〻民必以〻言下〻之　三八五
聖人無〻常心一　二八五
聖人常善救〻之　一六五
聖人終不〻爲〻大　三六七
聖人不〻積　四五〇
聖人爲而不〻恃　四三五
聖人無〻爲故無〻敗　三七六
聖人方而不〻割　三四二
聖人爲〻腹不〻爲〻目　七四
聖人欲〻不〻欲　三七六
聖人自知不〻自見一　四一二
聖人皆孩〻之　二八七
聖人處〻無爲之事一　三
聖人不〻病　四〇九
聖人不〻行而知　二七八
聖人能成〻其大一也　二〇六
聖人亦不〻傷〻人　三五三
聖人欲〻上〻民必以〻言下〻之　三八五
聖人無〻常心一　二八五
聖人常善救〻之　一六五
聖人終不〻爲〻大　三六七
聖人不〻積　四五〇
聖人爲而不〻恃　四三五
聖人無〻爲故無〻敗　三七六
聖人方而不〻割　三四二
聖人爲〻腹不〻爲〻目　七四
聖人欲〻不〻欲　三七六
聖人自知不〻自見一　四一二
聖人皆孩〻之　二八七
聖人處〻無爲之事一　三
聖人不〻病　四〇九
聖人不〻行而知　二七八
聖人能成〻其大一也　二〇六
聖人亦不〻傷〻人　三五三
稅を食むことの多きを以て　四二六
贅行　一四九
成器長　三九〇
清靜爲〻天下正一　二七一
小を大とし少を多とす　三六七
小を見るを明と曰ふ　三〇五
小國を取る　三五八
小國寡民　四四四
小國に下るときは則ち小國を　三五八
小國不〻過〻欲〻入事一人　三五八
小國以下〻大國一則取〻大國一　三五八
小鮮を烹るが若し　三五二
小と名づくべし　二〇六
少を多とす　三六七
昭昭　二三六
赤子に比す　三一〇
寂兮寥兮　一五二
絶學　二二
善　八
善淵　四六
善行　一六二
善計　一六二
善結　一六二

善建　三一三
善時　四六
善仁　四六
善信　四六
善人者不善人之師　一六七
善人に與す　四四一
善人之寶　三六一
善者不〻辯　四四八
善地　四六
善治　四六
善之與〻惡相去何若　二二
善抱　三一三
善者果而已矣　一八五
善者吾亦善〻之　二八五
善能　四六
善閉　一六二
善の善たることを知らば　八
善復爲〻妖　三三九
前後相隨　一〇
前識者道華而愚之始　二二七
川谷の江海に於けるが如し　一九八

そ

埏埴　六六
繹然而善謀　四一八
千里之行始〻於足下一　三七三
宗　二七・四〇六
早復　三四五
素を見はし樸を抱く　一二六
足下より始まる　三七三
俗人察察　一二六
俗人昭昭　一二六
屬する所ありて　一二六
疎而不〻失　四一八
其の厚きに處て其の薄きに　二三七
其出彌遠其知彌少　二七八
其未〻兆易〻謀　三七三
其の薄きに處らず　二二七
其中有〻信　一二四
其中有〻象　一二二
其中有〻精　一二二
其中有〻物　一二二
其の鋭を挫き　二八・二二七
其の榮を知りて　一七〇
其の得ざるを見るのみ　一七七
其の居る所を狹しとする　四一二
其の首を見ず　八八
其上不〻皦　八五
其鬼不〻神　三五三
其の居を安んず　四四四
其の極を知らん　三三九
其の極を知ること莫し　三四五
其の華に處らず　二二七
其の徼を觀んと欲す　四
其の子を知る　三〇二
其の黑を守れば　一七〇
其の心を虛にして　二二
其の志を弱くし　三二七
其の事あるに及びては　二八三
其の事を濟さば　三〇四
其事好〻還　一八二
其致〻之一也　二二一
其の資を愛せず　一六八
其の死を得ず　二五七
其死也堅强　四三〇
其死也枯槁　四三〇
其の死地なきを以てなり　二九三
其の師を貴ばず　一六八
其の雌を守れば　一七〇
其の食を甘しとし　四四四
其次侮〻之　一〇五
其次畏〻之　一〇五
其次親〻之　一〇五
其の實に處て其の華に　二二七
其の刃を容るる所なし　二九三
其神不〻傷〻人　三五三
其下不〻昧　八五
其の生ずる所を厭ふことなし　四一三

其の生を生とするの厚き　二九〇
其の辱を守れば　一七〇
其の後を見す　八八
其知彌少　二七八
其精甚眞　一三四
其の俗を樂み　四四四
其の兌を開き　三〇四
其の兌を塞ぎ　三〇四・三二七
其民缺缺　三三八
其民醇醇　三三八
其の塵に同くす　二八・三二七
其の角を投ずる所なし　二九三
其の爪を措く所なし　二九三
其の咎を遺す　五三
其德乃餘　三二五
其德乃普　三二五
其德乃眞　三二五
其德乃長　三二五
其德乃豐　三二五
其の所を失はざる者は久し　二〇〇
其の名を知らず　一五四
其名不去　一三四
其の根に歸る　一〇〇
其の白を知りて　一七〇
其の母を守れば　三〇三
其の腹を實にし　三二
其の光を用ひて其明に復歸　三〇五
其の光を和ぐ　二八・三二七
其微易散　三七三
其の服を美とし　四四四
其の復を觀る　九七
其の紛を解き　二八・三二七
其の骨を强くす　二三
其政察察其民缺缺　三三八
其政悶悶其民醇醇　三三八
其の身を外にして　四一
其の身を後にして　四一
其の無に當りて器の用あり　六六
其の無に當りて室の用あり　六六
其の無に當りて車の用あり　六六
其の明に復歸すれば　三〇五
其の妙を觀んと欲す　四
其の門を閉ぢ　三二七
其の門を閉づれば　三〇四
其脆易破　三七三
其安易持　三七三
其の已むに如かず　五一
其の雄を知りて　一七〇
其用不窮　三六九
其用不敝　三六九
其の私なきを以てに非ず耶　四一
其の私を成す　四一
其若海　一三六
其無正耶　三三九
其猶橐籥乎　三四
損　二五三
存するが若く　三七
存する若くなるに似たり　二八
存するが若く亡するが若し　二四四
尊行可以加人　三六一
夫莫之爵而常自然　二九八
夫唯不爭　一四〇
夫唯不爭故無尤　四六
夫唯不居　一五
夫唯大故似不肖　三八九
夫惟不可識　九〇
夫惟無知　四〇六
夫惟嗇是謂早復　三四五
夫惟不盈　九四
夫佳兵者不祥　一八八
夫物芸芸各歸其根　一〇〇

た

兌を塞ぐ　三〇四
兌を塞ぐ　三三七
大威至矣　四一三
大盈若沖　二六九
大怨を和すれども必ず餘怨　四四一

大曰逝　一五四
大を其の細に爲す　三六七
大音希聲　二四六
大巧若拙　二六九
大僞　二一
大器晚成　二四六
大軍之後必有凶年　一八二
大患を貴ぶこと身の若くす　七六
大國を治むるは少鮮を烹る　三五二
大國に取らる　三五八
大國者下流　三五六
大國不過欲兼畜人　三五八
大國以下小國則取小國　三五八
大象を執りて天下に往く　二〇九
大象無形　二四六
大匠に代りて斲る　四二四
大順　三八三
大成若缺　二六九
大制不割　一七四
大小多少　三六七
大道を行はしめば　三〇九
大道廢有仁義　二一
大道甚夷而民好徑　三〇九
大道汎兮其可左右　二〇五
大丈夫處其厚　二三七
大直若屈　二四六
大と名づくべし　二〇六
大者宜爲下　三五八
大方無隅　二四六
大辯若訥　二六九
泰を去り　一七九
太上下知有之　一〇五
太白若辱　二四六
太牢　二二六
多易必多難　三六七
多言數窮　三五
多藏必厚亡　二六四
多則惑　一三七
盜を爲さざらしむ　一九
盜夸　三一〇
盜賊無有　二一六
盜賊多有　三三二
道紀　八八
道常　一九四・二一七
高者抑之　四三三
忒はず　一七〇
橐籥　三四
武からず　三九八
戰則勝　三九六
戰勝以喪禮處之　二四六
惟無以生爲者是賢於貴生　四二六
唯施是畏　二〇九
唯道是從　一三二
唯道善貸且成　二五一
脫せず　三二三
譬道之在天下　一九八
谷得一以盈　三三一
谷の若く　九〇・二四六
谷無以盈將恐竭　二三四
恃まず　六四・二九九
尙ぶ　一九
玉を懷く　四〇六
民彌貧　三三二
民を愛し國を治めて　五七
民をして爭はざらしむ　一九
民をして死を重んじて　四四四
民をして盜を爲さざらしむ　一九
民をして復繩を結びて　四四四
民をして無知無欲ならしめ　二四
民自化　三二六
民自正　三三六
民自富　三三六
民復孝慈　二一六
民不畏死奈何以死懼之　四二一
民に上たらんと欲せば　三八五
民に先だたんと欲せば　三八五
民之飢以其上食稅之多　四三四
民之難治以其上之有爲　四二六
民之難治以其智多　三八一
民の心をして亂れざらしむ　一九

民之從事常於幾成而敗之　三七六
民之輕死以其求生之厚　四二六
民之生動之死地　二九〇
民之迷其日固已久矣　三三九
民利百倍　二六
民不畏威　四二二
民好徑　三〇九
民至老死不相往來　四四四
民多利器國家滋昏　三三一
淡乎其無味　三一〇
湛乎似若存　二八
澹兮其若海　二六
足らざるを補ふ　四三四
足らざるを損して餘あるに　四三四
足らざる者をば之を補ふ　四三三
足ることを知らざるより　二七五
足ることを知るの足るは　二七五
足ることを知る者は富む　二〇〇
足ることを知れば辱められず　二六七
孰爲此者　一四四
孰知其極　三三九
孰能有餘以奉天下　四三五
孰能安以久之徐生　九四
孰能濁以靜之徐清　九四
誰の子たるを知らず　三一

ち

智　二〇〇
智慧出有大僞　二一
智を棄つれば民の利百倍す　二六
智を以て國を治むるは國の賊　三八一
智を以て國を治めざるは國の福　三八一
地得一以寧　三三一
地を善くす　四七
地に法れば地　一五六
地大　一五五
地無以寧將恐發　二三四
治を善くす　四六
力あり　二〇〇
致詰すべからず　八四
持而盈之不如其已　五一
持し易し　三七三
知者　二四・三二七
知者不言　三二七
知なりと雖も大に迷ふ　一六八
馳騁　二五九
馳騁田獵令人心發狂　七一
長久　二六七
長久なるべし　三四九
長而不宰　六四・二九九
長生　四〇
長生久視之道　三四九
長短相形　一〇
中を守るに如かず　三五
中士聞道若存若亡　二四四
沖氣以爲和　二五三
沖而用之　二七
籌策　一六二
忠臣　二一
忠信之薄　三二七
寵爲上　七八
寵辱若驚　七六
重爲輕根　一五八
直而不肆　三四二
塵　二八・三二七

つ

宰らず　二九九
勤れず　三〇四
夭さざる哉　二三四
仍く　三二一
仍無敵　四〇一
既すべからず　二一〇
拙きが若し　二六九
勤めず　三七
勤而行之　二四四

強行者有志　二〇〇
常　一〇〇
常を知らざれば妄作して凶　一〇〇
常を知るを明と曰ふ　一〇〇・三一〇
常を知れば容る　一〇〇
常有司殺者殺　四二三
常與善人　四四一
常使民無知無欲　二四
常足　二七五
常善救人　一六五
常善救物　一六五
常心　二八五
常の名にあらず　一
常の道にあらず　一
積まず　四五〇
跂者不立　一四九
罪あるも以て免る　三六三
罪莫大於可欲　二七五

て

貞　二三一
貞たり　二三四
帝の先に象たり　三一
亭す　二九九
朝を終へず　一四四
朝甚除　三一〇
超然　一五九
敵を輕んずれば幾ど吾が寶　四〇三
滌除玄覽能無疵乎　五七
徹を司る　四四一
轍迹　一六二
天下不敢臣　一九四
天下を爲めば　八〇
天下を知る　二七八
天下樂推而不厭　三八六
天下を託すべし　八〇・八一
天下を取りて之を爲さんと　一七七
天下を取る　三三一
天下を取るには常に事無き　二八三
天下を觀る　三一七
天下を以て天下を觀る　三一七
天下を寄すべし　八〇
天下多忌諱而民彌貧　三三一
天下希及之　二六一
天下莫不知莫能行　四三八
天下に修むれば其德乃ち普　三二五
天下に輕くせん　一六〇
天下に强くせず　一八二
天下に蒞めば　三五三
天下往　二〇九
天下之交　三五六
天下貴　三二九・三六三
天下谿　一七〇
天下柔弱莫過於水　四三五
天下式　一七〇
天下の式となる　一四〇
天下の至堅を馳騁す　二九九
天下之至柔　二九九
天下正　一七一
天下大事必作於細　三六七
天下谷　一七〇
天下の爲めに其心を渾にす　二八七
天下貞　三三一
天下難事必作於易　三六七
天下母　一五二・三〇二
天下之牝　三五六
天下之物生於有　二四〇
天下王　四三八
天下神器　一七七
天下有始以爲天下母　三〇二
天下將自正　二一八
天下有道卻走馬以糞　二七四
天下無道戎馬生於郊　二七四
天下皆知美之爲美　八
天下皆謂我大似不肖　三八九
天下莫能與之爭　一四〇・三八六

天下莫能知莫能行　四〇六
天子を立て三公を置く　三六三
天道を見る　二七八
天道無親　四四一
天地相合以降甘露　一九六
天地不仁　三三
天地尚不能久　一四四
天地に先だちて生ず　一五二
天地之間其猶橐籥乎　三四
天地之根　三七
天地之始　三
天地所以能長且久者　四〇
天長地久　四〇
天乃道　一〇〇
天に事ふるには嗇に　三四五
天に法れば天　一五六
天に配すと謂ふ　三九八
天之所惡孰知其故　四一六
天之道　五三
天之道損有餘而補不足　四三四
天之道不爭而善勝　四〇八
天之道其猶張弓乎　四三三
天之道利而不害　四五一
天得一以清　二三一
天網恢恢疎而不失　四一八
天將救之　三九六
天大　一五五
天無以清將恐裂　二三四
天門開闔能爲雌乎　五七
恬淡爲上　一八九
田甚蕪　三一〇
田獵　七一

と

同塵　二八
戸を出でずして天下を知る　二七八
偸の若し　二四六
告莫大於欲得　二七五
尤なし　四六
德　三三五・三三五・三六七
德あり　三三一
德者同於德　一四六
德を失ひて而して後に仁あり　三三五
德を積む　三四五
德交歸　三五三
德畜之　二九七
德信矣　二八五
德乃眞　三三五
德乃長　三三五
德乃善　三三五
德善矣　二八五
德なし　三三一
德に同うする者　一四六
德之貴　二九八
德亦樂得之　一四六
毒す　二九九
毒蟲不螫　三三〇
解く可からず　一六二
獨立而不改　一五二
訥なるが若し　二六九
止まることを知れば殆から　一九七
止まることを知れば殆からず　二六七
止まる所なきに似たり　一三六
遠く徙らざらしむ　四四四
富　二〇〇
敦兮其若樸　九〇
沌沌兮　一二六
虎無所措其爪　二九三
執ることなし　三七六
執無兵　四〇一
執者失之　一七七・三七六

な

何謂貴大患若身　七九
何謂寵辱若驚　七八
何以知天下之然哉　三一七
何棄之有　三六一

長く且つ久しき所以　四〇
長く保つべからず　五一
爲さざることなし　二一七
爲さずして而して成る　二七八
爲さずといふことなし　二八一
爲而不爭　四五一
爲而不恃　一五・六四・二九九
爲すことなくして民自ら化　三三六
爲すことなくして爲さずと　二八一
爲すこと無し　三七六
爲す可からざる也　一七七
爲者敗之　一七七・三七六
名づくべからず　八五
名曰夷　八四
名曰希　八四
名曰微　八四
名遂　五三
名與身孰親　二六四
名なし　一九四
名可名非常名　一
名亦既有　一九七
猶ほ川谷の江海に於けるが如　一九八
繩を結びて之を用ふ　四四四
難易相成　一〇
難を其の易に圖り　三六七

に

濁　九四
濁るが若し　九〇
二生三　二五三
似たり　二七
象たり　三一
肖る　三八九

ぬ

拔けず　三一三

ね

根　一〇〇
根を深くし柢を固くす　三四九
根に歸るを靜と曰ふ　一〇〇

の

能を善くす　四六
後たることを舍てて且に先　三九一
嗌不嗄和之至也　三三〇

は

敗事なし　三七六
抱一　一四〇
抱樸　二一六
妄作　一〇〇
寶而持之　三九〇
方而不割　三四二
白　一七〇
泊兮其未兆　一二六
始制有名　一九七
昔之得一者　二三一
發狂　七一
辱められず　二六七
甚愛必大費　二六四
甚易行　四〇六
甚易知　四〇六
母　三・三四九
法令滋彰盜賊多有　三三二
反と曰ふ　一五四
反者道之動　二四〇
晩成　二四六
萬乘之主　一六〇
萬物得一以生　二三一
萬物負陰而抱陽　二五三
萬物作焉而不辭　一五

萬物を以て芻狗と爲す　三三
萬物を利して爭はず　四五
萬物歸焉而不爲主　二〇六
萬物恃之以生而不辭　二〇五
萬物草木之生也柔脆　四三〇
萬物並作吾以觀其復　九七
萬物に衣被して主とならず　二〇五
萬物之奥　三六一
萬物の自然を輔けて　三七六
萬物の宗に似たり　二七
萬物之母　三
萬物將自賓　一九四
萬物無不尊道而貴德　一九七
萬物將自化　二一八
萬物無以生恐滅　二三四
早く復ると謂ふ　三四五
腹を爲して目を爲さず　七四
春臺に登るが如し　二二六

ひ

微　八四
悲哀を以て之に泣く　一九二
未央　二二四
日を終へず　一四四
日益　二八一
日損　二八一
臂を攘げて而して之に仍く　二三一
光　二八・三〇五
光を和げ　三二七
光而不耀　三四二
下者舉之　四三三
美言不信　四四八
美言可以市　三六一
美の美たることを知らば　八
久しきこと能はず　一四四
左を尚ぶ　一九二
左を貴ぶ　一八八
左に處る　一九二
人を治め天に事ふるには嗇　三四五
人を兼ね畜はんと欲す　三五八
人を殺すことを樂む者は則　一九〇
人を殺すこと衆多なれば　一九二
人をして行妨げしむ　七一
人をして目爽せしむ　七一
人をして心狂を發せしむ　七一
人をして耳聾せしむ　七一
人をして目盲せしむ　七一
人を知る者は智なり　二〇〇
人を傷らず　三五三
人多技巧奇物滋起　三三二
人莫之令而自均　一九六
人法地地　一五六
人に勝つ者は力あり　二〇〇
人に事へんと欲す　三五八
人之生也柔弱　四三〇
人之所敎我亦敎之　二五七
人之所畏不可不畏　二二四
人の力を用ふと謂ふ　三九八
人之所惡唯孤寡不穀　二五三
人之不善何棄之有　三六一
人之道　四三四
牝　三五六
牝常以靜勝牡　三五六
牝牡之合　三二〇
微明　二二二
微妙玄通深不可識　九〇
百谷王　三八五
百姓を以て芻狗と爲す　三三
百姓の心を以て心と爲す　二八五
百姓皆注其耳目　二八七
百姓皆曰我自然　一〇八
冰釋　九〇
開くべからず　一六二
博者不知　四四八

ふ

富貴而驕自遺其咎　五三
深不可識　九〇
深矣遠矣　三八三
復歸　八五・一七〇・三〇五
復命曰常　一〇〇
福の倚る所　三三九
福兮禍所伏　三三九
伏する所　三三九
不言之敎　二・二六一
不穀　二五三
不仁　三二
不信者吾亦信之　二八五
不祥　一八八・四三八
不祥之器　一八九
不肖　三八九
不善　八
不善人之所保　三六一
不善人者善人之資　一六七
不善者吾亦善之　二八五
不道　三二三
不道早已　一八五
不昧　八五
無事を事とし　三六七
無事を以て天下を取る　三三一
紛　二八
紛を解く　三三七
文采を服す　三三〇
文而不足　一一六
冬川を涉るが若し　九〇

へ

兵　四〇一
兵を抗げて相加ふるに哀む　四〇三
兵を用ふ　三三一
兵を用ふるときは右を貴ぶ　一八八
兵を用ふるに言へることあり　四〇一
兵を以て天下に強くせず　一八二
兵を佳する者は不祥なり　一八八
兵强則不勝　四三一
兵不祥之器非君子器　一八九
兵無所容其刃　二九二
飄風不終朝　一四四
偏將軍處左　一九二
辯者不善　四四八

ほ

樸を抱く　二一六
樸散則爲器　一七四
樸に復歸す　一七〇
樸の若し　九〇
樸雖小天下不敢臣　一九四
伐ること勿かれ　一八五
矜ること勿かれ　一八五
欲すべきを見さざれば　一九
欲せずして以て靜かなれば　二二八
施是畏　三〇九
幾ど成らんとするに於て之　三七六
骨弱筋柔而握固　三二〇

ま

猛獸不據　三二〇
固已久矣　三三九
誠全而歸之　一四〇
將以愚之　三八一
跨者不行　一四九
亦十有三　二九〇
政善治　四六
牖を窺はずして天道を見る　二七八
學ばざるを學ぶ　三七六
召かずして自ら來る　四一八

前に處りて民害とせず　三八六
守則固　三九六

み

身を終ふるまで救はれず　三〇四
身を終ふるまで勤れず　三〇四
身を沒するまで殆からず　一〇〇・三〇二
身を觀る　三一七
身を以て之に後る　三八五
身を以てするを愛みて天下を　八一
身を以てするを貴びて天下を　八〇
身を以て天下に輕くせん　一六〇
身を以て身を觀る　三一七
身退　五三
身存　四一
身與貨孰多　二六四
身に修むれば其の德乃ち眞　三一五
身の若くす　七六
身の殃を遺すことなし　三〇五
右に處る　一九二
右を尙ぶ　一九二
右を貴ぶ　一八八
見ずして而して名かに　二七八
盈たす　二七・九四
盈つることを欲せず　九四
道　一五四
道者同於道　一四六
道生一　二五三
道を失ひて而して後に德あり　二三五
道を聞きて大に之を笑ふ　二四四
道を聞きて存するが若く　二四四
道を聞きて勤めて之を行ふ　二四四
道を爲せば日に損す　二八一
道を尊びて德を貴ばざるなし　二九七
道を以て人主を佐くる者　一八二
道を以て天下に涖めば　三五三
道生之　二九七
道乃久　一〇〇
道にあらざる哉　三一〇
道に同うする者　一四六
道に幾し　四五
道に法れば道　一五六
道之出口淡乎其無味　二一〇
道華而愚之始　三二七
道之尊德之貴　二九八
道常無爲而無不爲　二一七
道常無名　一九四
道之在天下　一九八
道之動　二四〇
道可道非常道　一
道之爲物　一三二
道之川　二四〇
道隱無名　二五一
道大　一五五
道沖而用之　二七
道者萬物之奧　三六一
道亦樂得之　一四六
道を以て　四三
自ら見はさず　四三
自ら見はさず故に明なり　一四〇
自見者不明　一四九
自勝者强　二〇〇
自ら生ぜず　四〇
自知不自見　四二
自知者明　二〇〇
自是者不彰　一四九
自ら是とせず故に彰はる　一四〇
自遺其咎　五三
自ら大なりとせざるを以て　二〇六
自ら貴しとせず　四二
自ら伐らず故に功あり　一四〇
自伐者無功　一四九
自ら矜らず故に長し　一四〇
自矜者不長　一四九
水に過ぐるはなし　四三七
水の若し　四五
水善利萬物而不爭　四五
皆注其耳目　二八七
皆知善之爲善　八
皆有以　一三〇
耳聾せしむ　七一

む

無　六六
無有入於無間　二五九
無爲を爲し無事を事とす　三六七
無爲を爲せば則ち治まらざる　二四
無爲乎　五七
無爲之益　二六一
無爲の益あることを知る　二五九
無爲之事　二三
無極に復歸す　一七〇
無閒　二五九
無狀之狀　八六
無象之象　八六
無知乎　五七
無知無欲　二四
無德司徹　四四一
無之以爲用　六八
無味を味ふ　三六七
無名之樸　二八
無名天地之始　三
無物に復歸す　八五
無欲　二四
無欲而民自樸　三三六
沖しきが若し　二六九

め

明　一〇〇・三〇五
明道若昧　二四六
明白四達能無知乎　五七
妙　四
冥分　一三二
目を爲さず　七四
目盲せしむ　七一
綿綿若存　三七
物あり混成す　一五二
物或損之而益　二五三
物或惡之　一四九・一八八
物或行或隨　一七九
物形之　二九七
物壯則老　一八五・三三三
物と反せり　三八三
物芸芸各歸其根　一〇〇
門　五・三七・三〇四
悶悶　一三六・三三八

も

目盲　七一
若肯久矣其細也夫　三八九
以て强を取らず　一八五
以て國を有つべし　三四八
以て之を愚にせんとす　三八一
以閱衆甫　一三四
以て民を明かにするにあらず　三八一
以て長久なるべし　二六七
以て天下を取るに足らず　二八三
以て天下の母たるべし　一五二
以て爲すことあり　三二
以て爲すことなし　三二
以至於無爲　二八一
求以得有罪以免　三六三
物あり　一三二

や

陽を抱く　二五三
徐清　九四
徐生　九四
安以久之　九四
敗るること無し　三七六
敝則新　一三七

敵れず　二六九
輟まず　三一三
病を病とす　四〇九
已むことを得ず　一八五

ゆ

勇　四一六
雄　一七〇
故能成二其私一　四一
故能成二其大一　三六七
故能長生　四〇
故幾二於道一　四五
行かずして而して知り　二七八
往而不レ害　二〇九
行くに行なく　四〇一
豐なり　三一五
弓を張るが如きか　四三三

よ

用を爲せばなり　六八
餘怨あり　四四一
餘食贅行　一四九
與を數ふることを致せば　二三六
與なし　二三六
善抱者不レ脱　三一三
善言無二瑕謫一　一六二
善應　四一八
善行無二轍迹一　一六二
善貸且成　二五一
善勝　四一八
善く之に下るを以て　三八五
善爲レ士者微妙玄通　九〇
善爲レ士者不レ武　三九八
善攝レ生者陸行不レ遇二兕虎一　二九三
善戰者不レ怒　三九八
善建者不レ拔　三一三
善勝レ敵者不レ與　三九八
善閉無二關鍵一而不レ可レ開　一六二
善謀　四一八
善計不レ用二籌策一　一六二
善利二萬物一而不レ爭　四五
善救レ人　一六五
善用レ人者爲二之下一　三九八
善爲レ道者非二以明レ民　三八一
善結無二繩約一　一六二
善救レ物　一六五
能如二嬰兒一乎　五七
能く行ふことなし　四〇六・四三八
能く楷式を知る是を玄德と　三八三
能知二古始一是謂二道紀一　八八
能く之と爭ふことなし　三八六
能爲レ雌乎　五七
能無レ疵乎　五七
能く知ることなく能く行ふ　四〇六
能成二其大一　二〇六・三六七
能長生　四〇
能濁以靜レ之　九四
能無レ離乎　五七
能爲二百谷王一　三八五
能無爲乎　五七
能安以久レ之徐生　九四
能敝不二新成一　九四
欲寡からしむ　一一六
克せずといふことなし　二四五
與善レ仁　四六
豫兮若二冬涉一川　九〇
據らず　三一〇

ら

類の若し　二四六
珞珞如レ石　二三六
亂之首　二一七

り

慮兮似レ無レ所レ止　一三六
利を棄つれば　一一六
利器　二一四
利劍を帶び飲食に厭く　三一〇
利而不レ害　四五一
利たるは　六八
陸行不レ遇二兕虎一　二九三
六親不レ和有二孝慈一　一一
鄰國相望　四四四
兩者各得二其所一欲　三五八

る

累土　三七三

れ

禮　三三五
禮者忠信之薄而亂之首　三二七
寥兮　一五二
廉而不レ劌　三四二

ろ

六親　一一
孫孫如レ玉　二三六

わ

王　三八五
王公以爲レ稱　二五三
王侯得レ一以爲二天下貞一　二三一
王侯自謂二孤寡不穀一　一三六
王侯若能守萬物將二自化一　二一八
王侯若能守萬物將二自賓一　一九四
王侯無レ以爲レ貞　二三四
王居二其一一　一五五
王乃天　一〇〇
王亦大　一五五
枉則直　一三七
和を知るを常といふ　三三〇
和光　二八
和光同塵　三一七
和ぜずして孝慈あり　一一
和之至也　三三〇
殃を遺すことなし　三〇五
禍の倚る所　三三九
禍兮福所レ倚　三三九
禍莫レ大二於不レ知レ足　二七五
禍莫レ大二於輕レ敵　四〇三
遺るるが如し　一二六
吾言甚易レ知甚易レ行　二三一
吾所二以有二大患一者爲二吾有レ身　四〇六
吾が寶を喪ふ　四〇三
吾が身ありと爲せばなり　七九
吾が身を無しとするに及びて　七九
吾不二敢爲レ主而爲レ客　四〇一
吾見二其不レ得レ已　一七七
吾不レ知二其名一　一五四
吾誰の子たるを知らず　三一
吾癸以知二其然一哉　三三一
吾有二何患一　七九
吾將レ以爲二教父一　二五七
吾以觀二其復一　九七
私無きを以てに非すや　四一
笑はざれば以て道と爲すに　二四四
我をして介然として知る　三〇九
我を知る者希なれば我貴し　四〇六
我を大なれども不肖に似た　三八九
我好レ靜而民自正　三三六
我無レ爲而民自化　三三六
我有二三寶一　三九〇
我愚人之心也哉　二二六
我獨若レ昏　二二六
我獨頑且鄙　二二〇
我獨泊兮其未レ兆　二二六
我獨異二於人一　二二〇
我獨闷闷　二二六
我獨若レ遺　二二六
我無事而民自富　三三六
我無欲而民自樸　三三六
我亦教レ之　二五七

（索引終）

大正十三年八月廿八日印刷
大正十三年九月一日發行

老子解義

定價 洋裝全一册 金四圓貳拾錢
和裝全二册 金四圓八拾錢

著者 東京市小石川區白山御殿町百七番地 簡野道明

發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹一平

印刷者 東京市神田區雉子町三十四番地 綾部喜久二

印刷所 東京市神田區雉子町三十四番地 宮本印刷所

發行所 東京市神田區錦町一丁目
【發貯金口座東京四九九一番】
【電話大手五八四五・六八六九番】
株式會社 明治書院

不許複製

K'51

簡野道明先生著

◆論語解義　全一冊　定價金參圓八拾錢　送本料金拾八錢

◆增修故事成語大辭典　全一冊　定價金六圓五拾錢　送本料金拾八錢

◆和漢名詩類選評釋　全一冊　定價金參圓五拾錢　送本料金拾六錢

◆補註論語集註　全一冊　定價金壹圓五拾錢　送本料金拾錢

◆補註孟子集註　全一冊　定價金壹圓七拾錢　送本料金拾錢

570
85

終